

張籍詩訳注 (15)

——「白頭吟」「將軍行」——

畑村 学
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (15)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(15)である。本篇には、29「白頭吟」・30「將軍行」(ともに中華書局『張籍詩集』卷一)の訳注を掲載する。

訳注

29 白頭吟

【題解】

白髮頭のうた。『樂府詩集』卷四一に相和歌辞の楚調曲の一つとして載録される。張籍以前に古辞をはじめとして、劉宋の鮑照、陳の張正見、初唐の劉希夷、盛唐の李白に同題の樂府がある。『樂府詩集』は、この他白居易の「反白頭吟」も掲載する。なお、『樂府詩集』には採録されていないが、晩唐の汪遵と邵謁にも同題の詩が見える(それぞれ『全唐詩』卷六〇二と六〇五)。

『樂府詩集』の解題に次のように言う。

『古今樂録』曰、「王僧虔『技録』曰、「白頭吟行」歌古「皚如山上雪」篇」。

『西京雜記』曰、「司馬相如將聘茂陵人女為妾。卓文君作『白頭吟』以自絶。

相如乃止。『樂府解題』曰、「古辞云「皚如山上雪、皎若雲間月」。又云、「願得一心人、白頭不相離」。始言良人有兩意、故來与之相決絶。次言別於溝水之上、叙其本情。終言男兒重意气、何用於錢刀。若宋鮑照「直如朱糸繩」、陳張正見「平生懷直道」、唐虞世南「氣如幽徑蘭」、皆自傷清直芬馥、而遭鑠金玷玉之謗、君恩似薄、与古文近焉」。一説云、「白頭吟」疾人相知、以新間旧、不能至於白首。故以為名。唐元稹又有「決絶詞」、亦出於此。

『古今樂録』に曰く、「王僧虔『技録』に曰く、「白頭吟行」の歌は古の「皚如山上雪」篇なり」と。『西京雜記』に曰く、「司馬相如 將に茂陵の人の女を聘して妾と為さんとす。卓文君 『白頭吟』を作りて以て自ら絶たんとす。相如乃ち止む」と。『樂府解題』に曰く、「古辞に云う「皚たること山上の雪

二〇〇六年十一月二十四日(受理)

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科助教
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科助教

の如く、皎たること雲間の月の若し」と。又云う、「願くは一心の人を得て、白頭まで相離れざらんことを」と。始めは良人に両意有り、故らに來たりて之と相決絶するを言う。次に溝水の上に別るるを言いて、其の本情を叙す。終には男児、意気を重んじ、何ぞ錢刀を用いんと言ふ。宋の鮑照「直きこと朱糸の縄の如し」、陳の張正見「平生、直道を懐う」、唐の虞世南「氣は幽徑の蘭の如し」の若きは、皆自ら清直芬馥なるに、金を鑠かし玉に玷するの謗りに遭うを傷む。君恩、薄きに似るは、古文と近し」と。一説に云う、「白頭吟」は人の相知りて、新を以て旧を間て、白首に至る能わざるを疾む。故に以て名と為す、と。唐の元稹に又「決絶詞」有るも、亦此より出づ。

漢の司馬相如には卓文君という妻がいたが、茂陵の女を妾にしようとした。その時文君が「白頭吟」を作ったため、相如は思いとどまったという。『西京雜記』卷三に見える話で、この卓文君の詠った「白頭吟」が一説に古辞「白頭吟」とされるが、『西京雜記』には「白頭吟」の歌詞は掲載されていない。古辞は、『宋書』樂志に「白頭吟」として掲載され、また『玉臺新詠』卷一には「皚如山上雪」と題し「古樂府六首」の一つとして掲載されている(字句に異同あり)。

古辞の内容は、男に二心があることを知った女が別れを決断したことを告げ、一心の人を得て白髪頭になるまで添い遂げることの難しさを言うものである。鮑照、張正見、李白、そして張籍もこれを踏襲しており、鮑照、張正見、張籍は、内容から宮女を主人公として詠ったものであり、李白の場合、『西京雜記』の話の踏まえて卓文君を想起させる女性を主人公にして詠っているようである。

いずれにしても、年を取るまで男女の関係を継続することが如何に困難であるかを、棄てられる女性の立場から詠うのが古辞をはじめとする同題樂府のテーマであり、そこに君臣関係などの人間関係を重ねて読むことが可能であろう。

それに対し、唯一劉希夷「白頭吟」だけは異なっている。劉希夷の詩は、紅顔の美少年であった人が今では白髪の老人になってしまったと詠っており、推移の悲哀がテーマとなっている。詩の形式も、古辞をはじめ先行する同題樂府が五言詩であるのと違い、七言詩である。あるいは劉希夷の詩は、『唐詩選』や『全唐詩』がこの詩のタイトルを「代悲白頭翁」としているように、もともと「白頭吟」ではなかったのかもしれない。

なお、『樂府詩集』の解題に虞世南「白頭吟」の詩句を引くが、虞世南の詩は『全唐詩』には見られない。また、『樂府詩集』は元稹の「決絶詞三首」も樂府「白頭吟」に連なる作品として掲載する。詩題の「決絶」の語は、古

辞に「聞君有兩意、故來相決絶」(君に兩意有るを聞く、故らに來たりて相決絶す)とあるのから取ったものである。

【本文・書き下し文】

- | | |
|------------|-------------------|
| 1 請君膝上琴 | 君に請う 膝上の琴もて |
| 2 彈我白頭吟 | 我が「白頭吟」を弾け |
| 3 憶昔君前嬌笑語 | 憶う昔 君前 嬌として笑語し |
| 4 兩情宛轉如縈素 | 兩情宛轉として 縈素の如し |
| 5 宮中爲我起高樓 | 宮中 我が爲に 高樓を起こし |
| 6 更開花池種芳樹 | 更に花池を開いて 芳樹を種えたり |
| 7 春天百草秋始衰 | 春天の百草 秋 始めて衰うるに |
| 8 棄我不待白頭時 | 我を棄つること 白頭の時を待たず |
| 9 羅襦玉珥色未暗 | 羅襦 玉珥 色 未だ暗からざるに |
| 10 今朝已道不相宜 | 今朝已に道う 相宜しからず と |
| 11 揚州青銅作明鏡 | 揚州 青銅もて 明鏡を作るも |
| 12 暗中持照不見影 | 暗中に持し照らせば 影を見ず |
| 13 人心回互自無窮 | 人心 回互して 自ずから窮まる無し |
| 14 眼前好惡那能定 | 眼前の好惡 那ぞ能く定まらん |
| 15 君恩已去若再返 | 君恩 已に去りて 若し再び返らば |
| 16 菖蒲花開月長滿 | 菖蒲 花開きて 月 長に満ちん |

【口語訳】

- 1 あなたよ どうか その膝に置いた琴で
- 2 私の「白頭吟」を弾いてください
- 3 思えば昔 君の御前で愛らしく微笑んでお話をしていた頃は
- 4 二人の情愛は 絡んだ白絹のように仲睦まじいものでありました
- 5 宮中に 私のために高殿を建てて下さり
- 6 その上 美しい池を作って 芳しい樹々を植えて下さいました
- 7 春に芽吹いたすべての草たちは 秋になって凋落し始めるというのに
- 8 私をお見棄てになつたのは まだ頭に白髪が生える前でした
- 9 薄絹のブラウスに玉のイヤリングは まだその色がくすんでもいないのに
- 10 今朝 「お前とはうまくいかない」とおっしゃいました
- 11 揚州にて 青銅で明るく輝く鏡を作っても
- 12 暗闇で手にとつて見れば そこに姿が写ることはないのです
- 13 人の心はころころ変わり その変化は止むことはなく
- 14 その時々好き嫌いの気持ちも 決して定まったものではないのです

15 君の寵愛は去ってしまい もし再び戻ってくることもあるとすれば
16 その時には 菖蒲に花が咲き 月はいつまでも満月であるでしょう

【押韻】

琴・吟―下平二一侵

語―去声九御・素―去声十一暮・樹―去声十遇 (古詩通押)

衰・宜―上平五支・時―上平七之 (『広韻』同用)

鏡―去声四三映・影―上声三八梗・定―去声四六徑 (古詩通押)

返―上声二〇阮・滿―上声二四緩 (古詩通押)

【語釈】

1・2 請君膝上琴、弾我白頭吟

〔請君〕相手に対する呼びかけの言葉で願望を表す。楽府では読者に対して用いられる場合が多いが、この詩の場合、同座の琴の演奏者に呼びかけて、自分の思いを唱うための「白頭吟」の演奏を依頼している。琴の演奏者に、この詩の読者が重ねられているのは言うまでもない。21「讌客詞」(巻一)、26「北邙行」(同)に用例が見えた。その注を参照。

〔膝上琴〕膝の上の琴。当時琴は椅子に座り、膝に抱えて弾くものであった。

同じ意味の「膝上弦」の並びで、『北史』后妃伝所引の詩に、「欲知心断絶、応看膝上弦」(心の断絶するを知らんと欲せば、応に膝上の弦を見るべし)とあり、寵愛を失った悲しみを弦の切れた琵琶に準えている。「膝上」の琴(弦)を詠じた詩は、唐代以前にはこの『北史』の例以外見当たらない。

唐代では、同時代の盧全「聽蕭君姪人彈琴」(『全唐詩』卷三八九)に、「彈琴人似膝上琴、聽琴人似匣中弦」(琴を弾けば 人は膝上の琴に似、琴を聴けば 人は匣中の弦に似る)とあり、劉禹錫「調瑟詞」(『箋証』卷二一)には、「却顧膝上弦、流淚難相統」(却顧す 膝上の弦、流淚して 相統くること難し)、白居易「想東遊五十韻」(二七一一)にも、「蜀琴安膝上、周易在牀頭」(蜀琴 膝上に安き、周易 牀頭に在り)とある。

楽府「白頭吟」と琴の關係については、陳の釈智匠『古今樂録』引く王僧虔『技録』(『樂府詩集』所引)に、

楚調曲有「白頭吟行」「泰山吟行」「梁甫吟行」「東武琵琶吟行」「怨詩行」。其器有笙、笛弄、節、琴、箏、琵琶、瑟七種。

楚調曲に「白頭吟行」「泰山吟行」「梁甫吟行」「東武琵琶吟行」「怨詩行」有り。其の器に笙、笛弄、節、琴、箏、琵琶、瑟の七種有り。

とあり、「白頭吟」が笙などの管楽器や琴や箏などの弦楽器で演奏されたことがわかる。

〔白頭吟〕楽府「白頭吟」については【題解】を参照。詩題ではなく、詩句として三字の並びで用いられた例が、楽府「白頭吟」中では、李白の其一に、「一朝將聘茂陵女、文君因贈白頭吟」(一朝 將に聘せんとす 茂陵の女、文君因りて白頭吟を贈る)、其二に、「五起鷄三唱、清晨白頭吟」(五起 鷄は三たび唱い、清晨 白頭の吟)とある。

唐以前の詩では一例、隋の孔德紹「夜宿荒村詩」(『文苑英華』卷二八九。『英華』は孔德紹とする)に、「勞歌欲叙意、終是白頭吟」(歌を勞して 意を叙せんと欲し、終に是れ白頭にて吟ず)とあり、孤独な旅人の愁いを詠ずる。

唐詩では、初唐から用例が見える。袁朗「秋夜独坐」(『全唐詩』卷三〇)に、「如何悲此曲、坐作白頭吟」(如何ぞ 此の曲を悲しみ、坐して白頭の吟を作す)あるのは、旅人の悲しみを詠うなかに見え、虞世南「怨歌行」(『全唐詩』卷三六)に、「誰言掩歌扇、翻作白頭吟」(誰か言う 歌扇を掩い、翻つて白頭吟を作ると)とあるのは、詩題からもわかるように寵愛を失った宮女の嘆きを言うなかに見える。

杜甫には九例の用例があり、唐詩中、際立つて多い。「奉贈王中允維」(『詳注』卷六)に、「窮愁必有作、試誦白頭吟」(窮愁 応に作有るべし、試みに白頭吟を誦えん)とあるのは楽府題をそのまま詩句に用いた例。鈴木虎雄氏は、杜甫が詩中で「白頭吟」と言う場合、楽府の「白頭吟」ではなく、みな自分の詩を指して言うとし、この詩もそうであるとする(『続国訳漢文大成』杜少陵詩集』卷六「奉贈王中允維」注)。

冒頭の二句、寵愛を失った宮女が、琴の演奏者に対して自分が詠う「白頭吟」に合わせて曲を演奏してくるよう依頼する。この二句のみ五言で、続く3句からは七言となり、宮女が歌う歌の内容となる。

3・4 憶昔君前嬌笑語、兩情宛轉如縈素

〔憶昔〕思えば昔。過去を振り返ってこのように言う。現在不幸な境遇にある女性が、幸せだった過去を思い出す場面の最初に用いられることが多い。張籍の14「別離曲」(巻一)に、「憶昔君初納采時、不言身屬遼陽戍」(憶う昔 君初めて納采せし時、言わず 身は遼陽の戍に属すと)とあった。その注を参照。

〔君前〕君王の前で。冒頭の「君」とは別の、宮女をかつて寵愛した人物である君王を指す。この詩と同じく君王の寵愛を失った宮女の嘆きを詠じた25「吳宮怨」(巻一)に、「君心与妾既不同、徒向君前作歌舞」(君心 妾と既に同じからず、徒らに君前に向いて 歌舞を作す)とあった。その注を参照。

〔嬌笑語〕愛らしくにつこりと微笑みながら語る。仲睦まじかった頃の女性の態度を指して言う。ここは「嬌笑して語る」「嬌として笑語す」の二通りの読み方が考えられる。

〔嬌笑〕は、唐以前の詩には用例が少なく、劉宋朝の樂府「讀曲歌八十九首」其六七(『古詩紀』卷六五)に、「嬌笑来向儂、一抱不能已」(嬌笑して来たりて儂に向かい、一たび抱きて 已む能わず)とあり、陳後主叔室「三婦艶詞十一首」其七(『樂府詩集』卷三五)、「小婦独嬌笑、新来華燭前」(小婦 独り嬌笑し、新たに華燭の前に来たる)とある。いずれも女性の愛くるしいしぐさを言う。

唐詩の用例もほとんどなく、同時代の白居易「新樂府五十首・牡丹芳」(〇一二五)に、「低嬌笑容疑掩口、凝思怨人如断腸」(低嬌は笑容の口を掩うかと疑い、凝思は怨人の腸を断つが如し)とあるのは、二字の並びは同じだが、熟語として用いられているわけではない。熟語としての用例は、同じく同時代の施肩吾「觀美人」(『全唐詩』卷四九四)に、「愛将紅袖遮嬌笑、往往偷開水上蓮」(紅袖を將て嬌笑を遮るを愛し、往往偷み開く 水上の蓮)とあり、張籍と同じく美人の動作を表現する際に使われている。

陳注は、「嬌として笑語す」と読んでおり、「笑語」の用例として、『毛詩』小雅「蓼蕭」に、「燕笑語兮、是以有誉処兮」(燕して笑語す、是を以て誉処有り)とあるのを引いている。「蓼蕭」のこの箇所は、鄭箋に「天子与之燕而笑語」(天子 之と燕して笑語す)と言うように、天子が宴席で諸侯と談笑する様子を詠っている。『毛詩』にはもう一例あり、同じく小雅の「楚茨」に、「猷疇交錯、礼儀卒度、笑語卒獲」(猷疇 交錯し、礼儀 卒く度あり、笑語 卒く獲)とあるのは、祭りの様子を詠うなかに用いられている。

詩における用例は、唐以前では王粲「贈士孫文始」(『文選』卷二三)に、「既度礼義、卒獲笑語」(既に礼義に度ありて、卒く笑語を獲たり)とあり、これは李善も引くように小雅「蓼蕭」を踏まえた表現。摯虞「答伏武仲詩」(『文館詞林』卷一五六)に、「同閉比屋、笑語卒獲」(閉を同じくし屋を比べ、笑語 卒く獲たり)とあるのも同じく「蓼蕭」を踏まえる。

唐詩にも多くの用例があり、うち王維「班婕妤三首」其三(趙注本卷一三)に、「総向春園裏、花間笑語声」(総べて向かう 春園の裏、花間 笑語の声)

とあるのは、宮女の声が春の花園から聞こえることを言う。

杜甫にも二例、「幽人」(『詳注』卷二二)に、「洪濤隠笑語、鼓社蓬萊池」(洪濤 笑語を隠し、柵を鼓す 蓬萊の池)、「百憂集行」(『詳注』卷一〇)に、「強将笑語供主人、悲見生涯百憂集」(強いて笑語を將て主人に供し、悲しみ見る 生涯 百憂集まるを)とある。張籍にはここ以外に用例がない。

〔嬌笑して語る〕か、〔嬌として笑語す〕か判断が難しいが、古くから詩語として用いられていること、用例の多さから考えて後者で読んだ。「嬌」の用例としては、張籍25「吳宮怨」(巻一)に、「座中美人嬌不起、宮中千門復万戸」(座中の美人 嬌として起たず、宮中 千門復た万戸)とあるのも、ここと同じく宮女の行為を詠っており、「嬌」の字が続く動作を修飾している点で共通する。

〔宛転〕情愛のくねくねと絡み合うさま。唐以前の詩文に用例が多く、ゆるやかに曲がるさま、物や時間に変化するさまなどの意味で用いられる。そのなかで、劉宋の湯惠休「楊花曲三首」其一(『樂府詩集』卷七七)に、「葢蕤華結情、宛転風含思」(葢蕤として 華は情を結び、宛転として 風は思いを含む)とあるのは、風の様子をこの語で表現しているが、張籍の詩と同じく、その後の思いと結びついている。

唐詩の用例も初唐から非常に多い。うち、張籍の詩と同じく男女の情愛と関係するものとしては、盛唐の劉方平「宛転歌二首」其一(『樂府詩集』卷六〇)に、「歌宛転、宛転恨無窮」(歌 宛転とし、宛転として 恨み窮まる無し)、同じく其二に「歌宛転、宛転傷別離」(歌 宛転とし、宛転として 別離を傷む)とある。

杜甫には二例見えるが、いずれも心情と結びついた例ではない。張籍の詩では、この他二首の詩で「宛転」の語が用いられている。うち、41「宛転行」(巻一)に、「宛転復宛転、憶君更未央」(宛転 復た宛転、君を憶いて更に未だ央ぎず)とあるのは、男性を思う女性の気持ちを表現しており、この詩と類似する。

なお、劉希夷「白頭吟」に「宛転蛾眉能幾時、須臾白髮乱如糸」(宛転たる蛾眉も 能く幾時ぞ、須臾の白髮 乱れて糸の如し)とあるのは、眉が美しくカーブを描くさまを言う。

〔繁素〕絡み合う白絹。君王と宮女の仲睦まじさを喩える。六朝・唐代を通じて詩の中に用例が見えない。張籍の432「憶遠曲」(巻七)に、「離憂如長線、千里繁我心」(離憂 長線の如く、千里 我が心を繁る)とあり、心情(この詩の場合別れの憂い)を糸に喩えてそれが心にまといつくこと表現しており、

こと類似する。

なお、李白の同題樂府二首其一に、「誰使女蘿枝、而來強攀抱」(誰か女蘿の枝をして、而來 強いて攀抱せしむるや)とある。

冒頭二句を受けて、宮女の「白頭吟」の内容が始まる。昔、君王からの寵愛を受けていた時の様子について、絡み合う白絹に喩えて詠っている。

5・6 宮中為我起高樓、更開花池種芳樹

「宮中為我起高樓」君が自分のためにわざわざ高樓を造ってくれた。

「宮中」は常見の語。この詩と同じく寵愛を失った宮女の悲しみを詠じた25「吳宮怨」(卷一)にも、「宮中千門復万戸、君恩反覆誰能數」(宮中 千門復た万戸、君恩 反覆す 誰か能く數えん)とあった。

宮女のために特別に家屋を建造することでその寵愛ぶりを表した例としては、吳王夫差が西施を住まわせるために硯石山上に造った「館娃宮」や、漢の武帝が子どもの頃、阿嬌(後の陳皇后)が妻となってくれば彼女のために金屋を建てようと言った故事が想起される。「館娃宮」については、25「吳宮怨」(前述) 参照。李冬生注も、詩題の解説でこの詩の宮女を漢の武帝の陳皇后(阿嬌)と想定しており、根拠については詳しく述べていないが、恐らくは5句の内容が根拠の一つになっているよう。なお、李白の同題樂府二首に、阿嬌の名が見える。

「高樓」は16「沙堤行呈裴相公」(卷一)及び20「節婦吟」(卷一)に見えた。その【語釈】を参照。特に後者の「節婦吟」では、夫が天子に重用されることで御苑に隣接するように高樓が建てられたことを言い、こと類似する。「妾家高樓連苑起、良人執戟明光裏」(妾が家の高樓は 苑に連なって起ち、良人 戟を執る 明光の裏)とある。

「更開花池種芳樹」建物だけでなく、花咲く美しい池を作り、芳樹を植えてくれもした。宮女に対する寵愛の深さを言う。

「花池」は花の咲く池。あるいは美しい池。ここではこの句が春の風景を詠っていることから、周囲に花の咲いている春の池を詠っていると解釈した。普通に使われることばのようだが、唐以前の詩ではわずかに一例を数えるのみである。梁の范筠「詠慎火詩」(『類聚』卷八一)に、「何期糝香草、遂得遶花池」(何ぞ香草に糝じるを期せん、遂に花池を遶るを得たり)とあるのは、慎火という植物を詠じた内容。唐詩にも用例がほとんどなく、張籍以外では後の用例だけである。

樂府詩集・百名家本は「華池」に作る。固有名詞としては、崑崙山の上に

ある伝説の池を言い、一般名詞としては景色の美しい池、あるいは花の咲く美しい池を言う。「楚辭」東方朔「七諫」に、「鷓鴣滿堂壇兮、鼃眼游乎華池」(鷓鴣 堂壇に滿ち、鼃眼 華池に遊ぶ)とあり、王逸注に「華池、芳華之池也」とある。詩の用例としては、曹丕「善哉行」(『宋書』樂志)に、「朝游高臺觀、夕宴華池陰」(朝に高臺の觀に遊び、夕べに華池の陰に宴す)とあり、陸機「塘上行」(『文選』卷二八)に、「被蒙風雲會、移居華池辺」(風雲の會に蒙られ、居を華池の辺に移す)とある。陸機の詩の用例として李善は、東方朔「七諫」の句を引いている。

唐詩の用例も初唐から見え、一例として盧照隣「曲池荷」(『全唐詩』卷四二)に、「浮香繞曲岸、円影覆華池」(浮香 曲岸を繞り、円影 華池を覆う)と見える。

杜甫には用例がない。張籍にもここ以外に用例がない。

「芳樹」は芳しい樹々。宮女の庭園に植えられた樹木を指す。次の7句に「春天」とあることからわかるように、春景色の典型として詠われている。

唐以前の用例としては、古くは漢代に「芳樹」(『宋書』樂志)と題する樂府がある。用例として著名なものを挙げれば、阮籍「詠懷詩十七首」其一二(『文選』卷二二)に、「芳樹垂綠葉、清雲自逶迤」(芳樹 綠葉を垂れ、清雲 自ら逶迤たり)とある他、陸機「答張士然」(『文選』卷二四)にも、「嘉穀垂重穎、芳樹發華顛」(嘉穀 重穎を垂れ、芳樹 華顛を發く)とある。

唐詩でも初唐の頃から多くの用例がある。劉希夷の同題樂府にも「公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前」(公子王孫 芳樹の下、清歌妙舞 落花の前)と見える。

杜甫には用例がない。張籍にはこの他二例、43「江南春」(卷二)に、「晴沙鳴乳燕、芳樹醉游人」(晴沙に 乳燕鳴き、芳樹に 游人酔う)とあるのは、詩題にあるように江南の春の様子を詠う中に見え、464「惜花」(卷七)に、「春潭足芳樹、水清不如素」(春潭 芳樹足り、水清きも 素に如かず)とあるのも春の景色であり、かつ水辺にある芳樹という点で「白頭吟」と共通する。

この二句は、宮女に対する君の寵愛ぶりを、建物の建造や造園という物質的な面から詠じている。宮女の幸福な時期は、花が咲き、木々の若葉が香る春の季節が相応しい。

以上四句がひとまとまりで、君王に寵愛を受けていた頃の宮女の幸福な様子が、特別に建ててもらった高樓とその前に広がる美しい池と芳しい木々の植えられた庭園の様子によって詠われている。

7・8 春天百草秋始衰、棄我不待白頭時

「春天百草秋始衰」春の日に茂った百草は、秋になって初めて枯れる。逆に言えば、秋になるまで枯れないということであり、次句の白髪頭になる前に棄てられた自分と対比して詠う。

「春天」は春の空、あるいは春の季節を指す。ここは「春の空から注がれる日差しや雨によって育まれた百草」という意味であろう。ただ、口語訳では「春に芽吹く多くの草花」と訳した。

普通に使われる言葉のようだが、唐以前の文学作品に用例がほとんど見当たらない。陳琳の作として伝わる詩句（遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』では、北宋の呉棫撰『韻補』卷二・下平声「尤」の項に引用されているとするが、該当箇所には見当たらない）に、「春天潤九野、并木渙油油」（春天 九野を潤し、并木 渙として油油たり）とあり、文学作品ではないが、『三國志』呉書・周魴伝に、「乞降春天之潤、哀拯其急、不復猜疑、絶其委命」（乞う春天の潤いを降り、哀しみて其の急なるを拯い、復た猜疑して、其の命を委ぬるを絶たざれ）とある。後者は自分に注がれる恩沢を指して言う。張籍のここも、君の寵愛を春の日差しに重ねているのである。

唐詩には初唐から用例が見える。張説『奉和三日祓禊渭濱应制』（『全唐詩』卷八九）に、「幸得飲娯承湛露、心同草樹樂春天」（幸いに飲娯するを得て湛露を承け、心は草樹に同じく 春天を樂しむ）とあるのは春の季節を言い、「草」と一緒に使われている。また、孟浩然「冬至後過吳張二子檀溪別業」（『全唐詩』卷一六〇）に、「梅花殘臘月、柳色半春天」（梅花 臘月に残り、柳色 春天に半ばす）とあるのは、春の空が柳の緑に染まる様子を詠っている。

杜甫には四例、そのうち「春日憶李白」（『詳注』卷一）に、「渭北春天樹、江東日暮雲」（渭北 春天の樹、江東 日暮の雲）とあるのは、春の空に向かつて立つ樹が詠われている。張籍はこの一例のみ。

「百草」は春に芽吹くすべての草。唐以前の詩文に多くの用例がある。『毛詩』小雅「四月」に、「秋日淒淒、百卉具腓」（秋日淒淒、百卉具に腓む）とある。「百卉」は「百草」に同じ。『毛詩』のこの箇所は、『藝文類聚』（歳時部上・秋）では「百草」に作っている。その他、宋玉「九弁五首」其三（『文選』卷三三）に、「皇天平分四時兮、竊独悲此凜秋。白露既下降百草兮、奄離披此梧楸」（皇天 四時を平分するも、竊かに独り此の凜秋を悲しむ。白露既下りて百草に降れば、奄ち此の梧楸を離披す）とあるのは、悲秋の情景を記した表現としてよく知られている。六朝の詩では、「古詩十九首」其一（『文選』卷二九）に、「四顧何茫茫、東風搖百草」（四顧 何ぞ茫茫たる、東風 百草を揺らす）とある等、多くの用例がある。

唐詩にも多くの用例があり、王維「贈裴十迪」（趙注本卷二）に、「春風動百草、蘭蕙生我籬」（春風 百草を動かし、蘭蕙 我が籬に生ず）とあるのは、春風と一緒に用いられた例。

杜甫には六例、うち「江頭五詠・麗春」（『詳注』卷一〇）に、「百草競春華、麗春応最勝」（百草 春華を競い、麗春 応に最も勝るべし）と言い、春の花のなかで「麗春」（虞美人草）が最も美しいことを詠い、「秋雨嘆三首」其一（『詳注』卷三）に、「雨中百草秋爛死、階下決明顏色鮮」（雨中 百草 秋に爛死するも、階下の決明 顏色鮮やかなり）とあるのは、秋雨により百草が枯れる様子を、秋初に黄色の花を咲かせる「決明」と対比して詠じている。

張籍にはこの他にもう一例、³³⁶「同嚴給事聞唐昌觀玉蕊近有仙過作二首」其一（卷六）に、「応共諸仙鬪百草、独來偷折一枝帰」（応に諸仙と共に百草を鬪わし、独り来りて一枝を偷み得て帰る）とある。

〔棄我不待白頭時〕年老いて白髪頭になる前に、私を棄てた。

「棄我」は、唐以前の詩では、「古詩十九首」其七（『文選』卷二九）に、「不念携手好、棄我如遺跡」（手を携えし好を念わず、我を棄つること 遺跡の如し）とあり、榮達した友人が不遇な自分を見捨てることを言う。また、郭泰機「答傅咸」（『文選』卷二五）にも、「衣工秉刀尺、棄我忽若遺」（衣工 刀尺を乗るも、我を棄つること 忽ち遺るが若し）とあり、「古詩十九首」の詩と同じく自分を顧みてくれないことをなじっている。李善は『毛詩』小雅「谷風」に、「將安將樂、棄我如遺」（將に安ぜんとす將に樂しまんとす、我を棄てて遺るが如し）とあるのを引く。この箇所を十三經注疏本の『毛詩』は「棄予如遺」に作っているが意味は同じ。李白の同題樂府二首其一に、「覆水再收豈滿杯、棄妾已去難重回」（覆水 再び収むるも 豈に杯に満たんや、妾を棄てて已に去りて 重ねて回り難し）とある。

「白頭の時を待たず」の「白頭」は、「白頭吟」の「白頭」であるが、「白」は五行で秋を表すことから、7句に詠われている春から秋への季節の変化と関連させているのかもしれない。

この二句は、前句で春の庭の様子を詠じていたのを受け、庭園の草花が秋に凋落するのを待たずに、君王からの寵愛を失うことを言う。

9・10 羅襦玉珥色未暗、今朝已道不相宜

「羅襦」うすぎぬの襦。「襦」は上半身に着る着物で、丈の短いものを指す。ここでは宮女が身につけている衣服。用例については、20「節婦吟」（卷一）

の注を参照。

〔玉珥〕玉製の耳飾り。すなわち、イヤリングを言う。屈原「九歌」東皇太一(『文選』卷三二)に、「撫長劍兮玉珥、瑇瑁鳴兮琳琅」(長劍の玉珥を撫れば、瑇瑁として 琳琅鳴る)とあるが、王逸注に「珥、謂劍鐔也」と言うように、刀のつばを指して言う。

美しい女性の装飾品として「珥」が詠われる例は、例えば曹植「洛神賦」(『文選』卷一九)に、「披羅衣之璀璨兮、珥瑇瑁之華瑤」(羅衣の璀璨たるを披て、瑇瑁の華瑤を珥む)など見えるが、二字の熟語としての用例は唐以前の詩に見当たらず、唐詩でも張籍のこの一例のみ。

なお、「珥」については、8「白紵歌」(卷一)に、「復恐蘭膏汚纖指、常遣傍人取墮珥」(復た 蘭膏の纖指を汚さんことを恐れ、常に 傍人をして 墮珥を収めしむ)とあった。その注を参照。

〔色未暗〕美しい色彩がまだ輝きを失っていないのに。8句と同じく、寵愛を失った時、宮女がまだまだ年若く美しいままであることを喩えている。

〔今朝〕けさ。詩の中で普通に使われる言葉。古くは『毛詩』小雅「白駒」に、「繫之維之、以永今朝」(之を繫ぎ之を維ぎ、以て今朝を永くせん)とある。唐代以前の詩及び唐詩に多くの用例があり、張籍にもこの他十二例が見える。

〔不相宜〕不釣り合いなことを言う。陳注も引く阮籍「詠懷詩八十二首」其四六(『阮籍集校注』卷下)に、「豈不識宏大、羽翼不相宜」(豈に宏大なるを識らざらんや、羽翼 相宜しからず)とあるのは、鶯や鳩が日の沈む場所である桑榆まで飛ぼうとしたり、海鳥が造物主の造った天池に行こうとするのは、その羽翼(力量)に不釣り合いであると詠う。阮籍の詩に擬した江淹「雜體詩三十首」の模擬詩(『文選』卷一九)には、「沈浮不相宜、羽翼各有歸」(沈浮 相宜しからず、羽翼 各おの帰く有り)とあり、先に挙げた阮籍の詩を踏まえて詠っている。

張籍以前の唐詩の用例はないが、張籍にはもう一例、328「唐昌觀看花」(卷六)に、「新紅旧紫不相宜、看覺従前兩月遲」(新紅旧紫 相宜しからず、看て覺ゆ 従前 兩月遲きを)とあるのは、新しく咲いた花と咲いて時間の経った花の色が不釣り合いであり、花見の時期を逸したことを詠う。

前二句が庭園の草花によって宮女が若く美しいまま寵愛を失う理不尽さを

詠っていたのに対し、この二句では宮女が身につけている美しい衣服や装飾品によって、同じ内容を詠っている。

以上の四句がひとまとまりで、女性の住まいにある庭の植物や女性の衣服や装飾品を用いて、年若く美しいままに棄てられたことを言う。

11・12 揚州青銅作明鏡、暗中持照不見影

〔揚州青銅作明鏡〕揚州の青銅で鏡を作る。唐代、銅鏡は揚州の名産品であり、毎年端午の日に長江の中央で鑄造にした鏡が皇帝に献上されたことはよく知られている(李肇『唐国史補』卷下、『旧唐書』德宗本紀上)。白居易「新樂府・百練鏡」(〇一四六)では、皇帝は人間こそ政治の鏡とすべきであるとして、そうした特別製の鏡を大事にすることを諷刺する内容である。

唐詩で、この揚州産の鏡を詠じた例として、韋応物「感鏡」(『韋応物集校注』卷六)に、「鑄鏡広陵市、菱花匣中発」(鏡を鑄す 広陵の市、菱花 匣中に発く)とある。「広陵」は揚州の古い呼び名で、この詩の鏡の持ち主は女性である。

青銅製の鏡が詩の中で詠われた例としては、唐以前の詩では、辛延年「羽林郎詩」(『玉臺新詠』卷一)に、「貽我青銅鏡、結我紅羅裾」(我に青銅の鏡を貽り、我が紅羅の裾を結ぶ)とあり、羽林郎の男が酒屋の娘に贈るプレゼントとして青銅の鏡が詠われる。その他、齊の釈宝月「行路難」(『玉臺新詠』卷九)に、「寄我匣中青銅鏡、情人為君除白髮」(我に寄す 匣中の青銅鏡、人を倩いて 君が為に白髪を除かん)とあり、これも男性である夫から女性のもとに贈られてきた鏡を指す。梁の沈約「少年新婚為之詠詩」(『玉臺新詠』卷五)に、「盈尺青銅鏡、徑寸合浦珠」(盈尺の青銅鏡、徑寸の合浦の珠)とあるのも、同じく男性から女性への贈り物。

唐詩中で青銅の鏡が詠われる例としては、崔顥「雜詩」(『全唐詩』卷一三〇)に、「可憐青銅鏡、挂在白玉堂」(憐むべし 青銅の鏡、掛けて白玉堂に在り)とあり、この詩でも鏡は美女の持ち物として詠われる。同時代の白居易「感鏡」(〇四七五)に、「経年不開匣、紅埃覆青銅」(年を経て 匣を開かず、紅埃 青銅を覆う)と詠われるのは、別れた女性が残っていた青銅の鏡である。

男性の持ち物としても青銅の鏡は詠われる。李益「罷鏡」(『全唐詩』卷二八二)に、「手中青銅鏡、照我少年時」(手中 青銅の鏡、我が少年の時を照らす)とあるのは、作者である李益が青銅の鏡を手にし、年老いた姿を見て悲しむという内容であり、同時代の白居易「照鏡」(〇四四一)に、「皎皎青銅鏡、斑斑白糸鬢」(皎皎たり 青銅の鏡、斑斑たり白糸の鬢)とあるのも、白居易自身が鏡を見るという内容である。

この二句は、行為の主体を女性を棄てた「君」（男性）とするか、棄てられた宮女とするかで解釈が分かれている。

李冬生注は、「持照不見影」は鏡が長い間使われていて、その間磨かれていないことを言うとし、それは秋になり夏に使われた扇が棄てられるのと同じく、宮女が寵愛を失ったことを暗に表現すると述べる。李建崑注もほぼ同様の解釈をしている。

それに対し李樹政注では、揚州産の有名な銅鏡であつても、暗いところで見れば、姿は全く見ることはできない。君心は明鏡のようであるけれども、心がねじ曲がつた輩に隠されてしまえば、善悪を見分けることができない（邪悪な勢力により朝廷が牛耳られ、綱紀が乱れていることの喩え）とする。李樹政注は、白居易「新樂府・百練鏡」と同じく、揚州産の青銅鏡を皇帝の持ち物であるとして解釈し、そこに寓意を読みとっているのである。

どちらの解釈も成り立ちうるが、唐以前の詩、特に閨怨詩には鏡は女性の持ち物として詠われる例が多く、かつ韋忠物の「感鏡」にあつたように、揚州産の鏡が必ずしもすべて皇帝（君）の持ち物として詠われるわけではないこと、さらに、11・12句までの詩のなかで、まだ若く美しい宮女が棄てられることを、植物や女性の装飾品を用いて繰り返し詠っていることから考えて、ここに出てくる青銅の鏡は、宮女の持ち物であり、かつ失寵後の宮女自身を象徴しているとして解釈した。そのように考えると、鏡（すなわち宮女）の産地である揚州には、「美人の出身地」というイメージも付与されているのかもしれない。

安史の乱後の揚州が、経済都市として繁栄を極めたことは周知の通りであり、揚州の賑わいや妓楼の様子は中晩唐の詩に多く詠われる。なかでも晩唐の杜牧がその詩で頻りに詠ったことで、揚州には男女の色恋の街としてのイメージが定着する。ただ、こうした美人の多い街という揚州のイメージは、張籍の頃にもすでにあつたと思われる。先に見た韋忠物「感鏡」が、美しい女性の持ち物としての揚州産の鏡が詠われていたし、また、張籍と同時代の徐凝「憶揚州」（『全唐詩』卷四七四）にも、「蕭娘臉下難勝淚、桃葉眉頭易得愁」（蕭娘の臉下 涙に勝え難し、桃葉の眉頭 愁いを得易し）とあり、揚州での甘美な思い出に美しい女性が登場する。

「明鏡」は物を照らし出す明るい鏡。唐以前の詩文に多くの用例がある。ここでは詩のなかで女性と関連する用例をいくつか挙げる。秦嘉「贈婦詩三首」其三（『玉臺新詠』卷一）に、「宝釵可耀首、明鏡可鑒形」（宝釵 首を耀かすべく、明鏡 形を鑒むべし）とあるのは、秦嘉が妻に贈った鏡を言う。また徐幹「室思詩六章」其三（『玉臺新詠』卷一）には、「自君之出矣、明鏡暗不治」（君の出でしより、明鏡 暗くして治めず）とあり、帰らぬ夫を思

い、鏡を手入れする気にもならないと詠われている。唐詩にも、初唐の頃から多くの用例がある。杜甫には三例、うち「懷旧」（『詳注』卷一四）に、「老罷知明鏡、帰來望白雲」（老罷むこと 明鏡知る、帰りに来たりて 白雲を望む）とあり、鏡を見ることで自分が年老いたことを知ると詠われている。張籍にはこの一例のみ。

「暗中持照不見影」暗い部屋で鏡を手を持って見ても、姿は映らない。「持照」について、李白の同題樂府二首其二に、「願持照新人、双対可憐影」（願わくは持して新人を照らせ、双対 可憐の影）とある。

この二句は、せっかくの揚州産の美しい鏡も暗闇に置かれては価値がないのと同じように、君の寵愛を失ってしまったのは、若さも美しさも何の意味もないことを言う。

13・14 人心回互自無窮、眼前好惡那能定

「人心」人の心。古くから経書をはじめとして多くの詩文で用いられる。直接には宮女を棄てた君の心を指す。一例として、李白「古風五十九首」其二三（王琦注本卷二）に、「人心若波瀾、世路有屈曲」（人心 波瀾の若し、世路に屈曲有り）とあり、変化しやすい人の心を大きな波に喩えており、張籍のここと類似する。李白の同題樂府二首其一にも、「両草猶一心、人心不如草」（両草も猶お一心、人心は草に如かず）とある。

杜甫には用例がない。張籍の用例もこの一例のみ。

「回互」転変する。人の心がころころと変わることを言う。

唐以前の詩には古い用例が見当たらない。賦では、木華「海賦」（『文選』卷一二）に、「乖蛮隔夷、迴互万里」（蛮に乖き夷を隔て、万里に迴互す）とあるのは、波が万里に渡ってうねうねと続く様子を言い、謝靈運「山居賦」（『宋書』謝靈運伝所収）に、「階基回互、椽樞乘隔」（階基は回互し、椽樞は乗り隔つ）とあり、山居にある建物の基礎部分がめぐり交わる様子を言う。詩では、梁の昭明太子「開善寺法会詩」（『広弘明集』卷三〇上）に、「詰屈登馬嶺、迴互入羊腸」（詰屈として 馬嶺に登り、迴互して 羊腸に入る）とあり、羊の腸のような坂をくねくねと進む様子を言う。

唐詩では、張籍以前の用例が少ない。高適「自淇涉黄河途中作十三首」其六（『全唐詩』卷二二二）に、「帰意方浩然、雲沙更迴互」（帰意 方に浩然とし、雲と沙と 更にも迴互す）とあるのは、雲と砂が入り交じりながらどこまでも続くさまを言う。

杜甫には二例、杜甫「宿花石戍」(『詳注』卷二二)に、「四序本平分、氣候何迴互」(四序 本平分なるに、氣候 何ぞ迴互する)とあるのは、氣候がちくはぐな風土を表現して言う。陳注も引く杜甫「有懷台州鄭十八司戸」(『詳注』卷七)にも、「相望無所成、乾坤莽回互」(相望むも 成る所無く、乾坤 莽として回互す)とあり、天と地が混じり合つてどこまでも続く様子を言う。張籍の用例はこの一例のみ。

なお、蜀刻本は「廻牙」に作るが、字体の類似による筆写の誤りであろう。

「眼前好悪」その時々眼の前で示される好き嫌いの感情。

「眼前」は文字通り「眼の前」。22「永嘉行」(卷二)に、「婦人出門隨亂兵、夫死眼前不敢哭」(婦人 門を出でて 乱兵に隨い、夫 眼前に死するも 敢えて哭さず)とあつた。その注を参照。

「好悪」は、人の好み。好き嫌い。古くから経書を初めとして多くの用例がある。『礼記』樂記に、「夫物之感人無窮、而人之好悪無節、則是物至而人化物也」(夫れ物の人に感ずること窮まり無くして、人の好悪に節無ければ、則ち是れ物至りて人 物に化するなり)とある。唐以前の文学作品では、屈原「離騷」(『文選』卷三二)に、「人好悪其不同兮、惟此党人其独異」(人の好悪は其れ同じからざるも、惟だ此の党人のみ其れ独り異なる)とあり、好き嫌いは人によつて異なるという。詩では、曹植「當事君行」(『曹植集校注』卷三)に、「好悪隨所愛憎、追攀逐声名」(好悪 愛憎する所に隨い、追攀して 声名を逐う)などの用例が見える。

唐詩の用例も多く、陳注に引く儲光義「貽王侍御出臺掾丹陽」(『全唐詩』卷一三八)に、「析榭増広運、直道有好悪」(析榭は広運を増し、直道に好悪有り)とある。杜甫には二例、うち「莫相疑行」(『詳注』卷一四)に、「寄謝悠悠世上兒、不爭好悪莫相疑」(寄謝す 悠悠世上の兒に、好悪を争わず 相疑うこと莫かれ)とあるのは、人の好き嫌いを言う。張籍の用例はこの一例のみ。

この二句は、張籍「白頭吟」のテーマとなつてゐる。人の心は変わりやすいため、その時々好き嫌いの感情も決まつたものではないことを言う。鮑照の同題樂府に、「心賞固難恃、貌恭豈易憑」(心賞 固より恃み難し、貌恭 豈に憑み易からんや)とあるのは、深い愛でさえも頼りにならず、ましてや恭しい容貌などあてにならないと詠つており、張籍の二句と類似する。

以上の四句がひとまとまりで、寵愛を失つて一人暗い部屋にいる宮女が、人の心の変わりやすさを嘆いて詠つてゐる。

15・16 君恩已去若再返、菖蒲花開月長滿

〔君恩已去〕「君恩」は君王の恩愛。この詩と同じく寵愛を失つた宮女の愁いを詠じた25「吳宮怨」(卷一)に、「宮中千門復万戸、君恩反覆誰能數」(宮中 千門復た万戸、君恩反覆す 誰か能く數えん)と見えた。その注を参照。なお、李白の同題樂府二首其一に、「但願君恩顧妾深、豈惜黃金將買賦」(但願う 君恩 妾を顧みること深きを、豈に惜しまんや 黃金 將て賦を買うを)とある。

「已去」は、李白の同題樂府二首其一に、「覆水再收豈滿杯、棄妾已去難重回」(覆水 再び収むるも 豈に杯に滿たんや、妾を棄てて已に去りて重ねて回り難し)とあり、張籍の二句と同じく男性が去つて二度と戻つてこないことを比喻を用いて表現している。

〔菖蒲花開月長滿〕菖蒲に花が咲き、月がいつまでも丸い。君恩が再び得られないことを、現実に見ることが困難な自然現象を喩えにして詠つてゐる。

「菖蒲」は多年生の水生植物で、葉は劍の形をし、草や根茎は薬草として用いられる。初夏に淡黄色の小さな花をつける。

菖蒲が文学作品に記される例として、古くは司馬相如「子虛賦」(『文選』卷七)に、「其東則有蕙圃、衡蘭芷若、芎藭菖蒲」(其の東には則ち蕙圃有り、衡 蘭 芷若、芎藭 菖蒲あり)とあり、雲夢沢に生える香草の一つとして登場する。唐以前の詩で菖蒲の花が詠われる数少ない例として、劉宋の頃の作とされる「近代西曲歌五首」其三「烏夜啼」(『玉臺新詠』卷十)に、「菖蒲花可憐、聞名不曾識」(菖蒲 花 憐むべし、名を聞くも 曾て識らず)とある。歌舞する少年のこれまで見たことのないほどの美しさを菖蒲の花に喩える。

ここの「花開」について、唐詩品彙・静嘉堂本・全唐詩はテキストの『張籍詩集』と同じく「花開」に作り、全唐詩は「一作青、一作生」と注記する。蜀刻本・唐文粹・叩彈集・百名家本は「花青」に作り、百名家本は「一作生」と注記する。樂府詩集は「花生」に作る。

『叩彈集』の編者杜詔は、張籍の末句に注して先に用例として挙げた「烏夜啼」の二句を引き、「蓋菖蒲難花、月不長滿。傷君恩之不再也」(蓋し菖蒲は花さき難く、月は長には滿ちず。君恩の再びならざるを傷むなり)と述べてゐる。陳注・徐注・李樹政注も同様の解釈をしており、菖蒲に花は咲かず、月はいつまでも満月のままではないとし、この句が君恩が再び得られないことの喩えであるとする。李建崑注も陳注を引用しているので同じように解釈していると考えられる。李冬生注は同様に解しながらも、菖蒲は実際は初夏に淡黄色の花を咲かせる植物であり、もっぱら葉の部分を用いられたため、

花を咲かせないと誤解されるに至ったと説明する。その上で、古典詩のなかでは少なからず菖蒲の花が詠われるとし、例として初唐の喬知之と北宋の歐陽脩の詩句を挙げている。

喬知之の詩は「定情篇」(『全唐詩』卷八一)であり、「君念菖蒲花、妾感苦寒竹。菖花多艷姿、寒竹有貞葉」(君は菖蒲の花を念い、妾は苦寒の竹に感ず。菖花 艷姿多く、寒竹 貞葉有り)と詠われている。

張籍以前の唐詩には、喬知之の詩以外に菖蒲の花はほとんど詠われることはない。李白「送楊山人歸嵩山」(王琦注本卷十七)に、「爾去掇仙草、菖蒲花紫茸」(爾去りて 仙草を掇れば、菖蒲 花は紫茸)とあるのは、「仙草」と言うように仙薬としての菖蒲の花であり、その花が紫色と言うのもこれが特別な菖蒲であることを示しているであろう。陳注引く李白「嵩山采菖蒲者」(王琦注本卷二五)に、「我來采菖蒲、服食可延年」(我來たりて 菖蒲を採る、服食すれば 延年すべし)とあるのも、花ではないが、仙薬としての菖蒲を詠った例である。

菖蒲に実際にどのような花が咲くのか、張籍が果たして知っていたかどうかはわからないが、菖蒲の花を見ることがなかなか容易ではないということ、当時の人々の共通の認識であったようだ。例えば、元稹「寄贈薛濤」(『元稹集』卷七)に、「別後相思隔煙水、菖蒲花發五雲高」(別後 相思うも煙水を隔つ、菖蒲花發きて 五雲高し)とあるのは、薛濤に会うことができないことを、菖蒲の花が開いたり五色の瑞雲が現れたりするのを見ることに喩えて、それが不可能であることを詠っている。元稹の詩は「菖蒲花發」の四字の並びが張籍とほぼ同じである。また、同時代の歐陽詹「聞隣舍唱涼州有所思」(『全唐詩』卷三四九)に、「因之増遠懷、惆悵菖蒲花」(之に因りて遠懷を増し、菖蒲の花を惆悵す)とあるのも、遠く懐う人(有所思)に会えないことを菖蒲の花を用いて詠い、同じく中唐の施肩吾「古相思」(『全唐詩』卷四九四)にも、「十訪九不見、甚於菖蒲花」(十たび訪うも 九たび見えず、菖蒲の花よりも甚だし)と言い、前二詩と同じく思いを寄せる人(相思)に会えないことを菖蒲の花を引き合いに出して詠っている。

『樂府詩集』は「花生」に作り、意味は「花開」とほとんど同じ。蜀刻本や唐文粹等は「花青」に作り、その場合「從來黄色の花を咲かせるはずの菖蒲が青い花をつける」ということになる。ただし、先に述べたように、菖蒲の開花が現実では見ることが困難なことの喩えとして広く用いられていることを考えれば、わざわざ「青」としなくても「花開」で十分意を尽くしており、菖蒲に花が咲くことを知って疑問に思った後人による改作の可能性が考えられる。

「菖蒲」の用例は、杜甫にはない。張籍にこの他二例、430「寄菖蒲」(卷

七)に、「石上生菖蒲、一寸十二節」(石上 菖蒲を生じ、一寸 十二節)とあるのは、仙薬としての菖蒲を詠い、467「山中醜人」(卷八)に、「向晚歸來石窓下、菖蒲葉上見題名」(晩に 向として 歸り來たる石窓の下、菖蒲の葉上 題名を見る)とあるのは、留守中に來訪者が來て、その旨を菖蒲の葉に書き付けて歸ったことを詠っている。

〔月長滿〕月が永遠に丸いこと。靜嘉堂本は「長」を「常」に作る。意味は同じ。

以上の二句がひとまとまりで、菖蒲の花と満月に喩えて、君の寵愛が二度と得られないことを詠い詩を結ぶ。

【補】
一 「白頭吟」の構成

この詩は、押韻及び詩の形式(二句の字数)から1・2 / 3 / 6 / 7 / 10 / 11 / 14 / 15・16句の五段に分けることができる。

- 1・2 琴の伴奏を依頼
- 3 / 6 「白頭吟」の内容① 過去の幸せ
- 7 / 10 「白頭吟」の内容② 突然の別れ
- 11 / 14 「白頭吟」の内容③ 現在の不遇
- 15・16 「白頭吟」の内容④ 絶望

冒頭の1・2句は、他の句がすべて七言であるのに対し五言になっている。これは、【語釈】でも述べたが、1・2句が自分の唱う「白頭吟」の伴奏を依頼する言葉であり、3句以降が宮女が実際に唱う「白頭吟」の具体的な内容となっていることと関連しており、そうした内容の変化を詩の形式の上からもわかるようにしているのである。

二 張籍「白頭吟」の特徴①——李白の影響

張籍「白頭吟」は、テーマとしては古辞を初めとする先行の同題樂府の流れを受けつつ、詩の形式や押韻、表現方法においては、特に李白の同題樂府から強く影響を受けていると思われる。

先ず詩の形式について見てみると、張籍の詩は、冒頭の二句が五言で、3

句目から七言に変化している。李白の詩も、最初五言で始まるが、途中から七言や五言の句を交えて詠われている。こうした雑言形式のものは、同題樂府中李白と張籍の二人だけである。

次に押韻についてである。同題樂府中、鮑照と張正見の詩は一韻到底となつてゐるのに対し、張籍の詩は、「押韻」のところ指摘したように、二句あるいは四句で換韻している。同じように換韻しているのは、テーマが異なる劉希夷以外では、古辞と李白の詩だけである。

最後に表現についてである。張籍の詩に見える語句で、先行する同題樂府にも使われているものについては、「語釈」のなかで触れたが、特に李白の詩に共通するものが多く確認できた。ここで改めて共通・類似する詩句や表現を見てみると次のようになる。へへへは李白の二首のうちどちらに見えるかを示す。

白頭吟（其一・二） 君恩（其一） 人心（其一） 棄妾（我）（其一）
已去（其一） 持照（其二） 鏡（其二）

この他にも、李白其一の27・28句に、「覆水再收豈滿杯、棄妾已去難重回」（覆水再び収むるも、豈に杯に満たんや、妾を棄てて已に去りて、重ねて回り難し）とあるのは、男性が二度と戻ってこないことを人口に膾炙した覆水と杯の比喩で表現しているのであるが、これは張籍の15・16句、「君恩已去若再返、菖蒲花開月長滿」（君恩已に去りて、若し再び返らば、菖蒲花開きて、月長に満ちん）と、ほとんど同じことを詠っていると言える。そして内容だけでなく、句の関係においても、一方が事実を述べ、もう一方がそれを比喩によつて表現しているという点でも共通している。

以上のように、張籍「白頭吟」は、テーマでは先行する同題樂府の流れを引き継ぎつつも、詩の形式や押韻の方法、詩の表現において、特に李白の「白頭吟」の影響を受けていることが確認できた。張籍の詩における杜甫の影響についてはこれまでの訳注でもたびたび触れてきたが、樂府作品においては李白も念頭において見ていく必要があるかもしれない。

三 張籍「白頭吟」の特徴②——故事の不使用と比喩表現

張籍「白頭吟」は、同題樂府の系譜の上に確かに位置しており、なかでも先に指摘したように李白の詩から詩語や表現の面で影響を受けているのであるが、やはり他の同題樂府と比較した場合、張籍の特徴を見出すことができる。結論から言えば、それは女性の悲しみのリアリティである。そしてその

リアリティを感じさせる要因の一つが、他の同題樂府のように故事を踏まえた表現を用いないことにあると考えられる（なおここでの比較は、劉希夷の詩は除外して考えた。劉希夷の詩を比較の対象から外す理由については「題解」を参照）。

過去の同題樂府を見て特徴的なのは、語り手である女性が失寵の怨みを詠ずる際に、過去同じような境遇にあった女性を登場させていることである。鮑照の詩の該當箇所は次のようになっている。

申黜褒女進 申は黜しりぞけられて 褒女進み
班去趙姬升 班は去りて 趙姬升る

上句は周の幽王が褒姒を寵愛するようになって申后を退けた故事（『毛詩』小雅「白華」の序）を踏まえ、下句は漢の成帝が班婕妤を退けて趙飛燕を寵愛するようになった故事（『漢書』外戚伝・班婕妤「怨歌行」）を踏まえている。いずれも非常に有名な故事であり、語り手の女性が自らを重ねる相手としては格好の女性であったと言える。

張正見の詩にも同様の表現が見える。

王嬙没故塞 王嬙 故塞に没し
班女棄深宮 班女 深宮に棄てらる

上句は漢の元帝の宮女で、匈奴に嫁いで悲嘆のうちに異国の地で没した王昭君の故事（『漢書』匈奴伝下、『後漢書』南匈奴伝など）を踏まえ、下句は、鮑照と同じく班婕妤の故事を踏まえている。

こうした故事を踏まえた表現は、李白の詩において最も顕著である。「題解」で述べたように、李白の詩全体が司馬相如と卓文君の故事を随所で踏まえているが、この故事以外にも寵愛を失った女性や、逆に死んでも愛を保ち続けた男女の故事が詩の中の表現として使われている。以下該當する箇所を其一から抜き出すと次のようである。

此時阿嬌正嬌妬 此の時 阿嬌 正に嬌妬し
独坐長門愁日暮 独り長門に坐して 日暮を愁う

「阿嬌」は漢の武帝の陳皇后の幼名で、幼い頃から阿嬌を気に入っていた武帝の皇后となるが、やがて武帝が衛子夫を寵愛するようになったことで、嫉妬深い彼女はやきもちを焼き、武帝から長門宮に幽閉される（『史記』外戚

世家、『漢書』外戚伝)。この二句はその故事を踏まえる。

古時得意不相負 古時 意を得て 相負かざるは
 祇今唯見青陵臺 祇だ今 唯だ見る 青陵臺

春秋時代、宋の康王は部下の韓朋の妻を奪い、韓朋を青陵台の工事に駆り出してそこで殺してしまふ。妻は喪に臨むことを願ひ青陵台に行くが、そのままたの上から身を投じて自殺した。康王は二人を台の左右に埋めさせたところ、一年後にそれぞれの墓から梓の木が生え、やがて大きくなつて枝を交わすようになった。枝には二匹の鳥が哀しく鳴き、人々は「相思樹」と呼んだ(『搜神記』卷一―など)。

この二句は長編の詩の結びに当たっており、結びの箇所は韓朋とその妻の故事が使われていることから、李白「白頭吟」において男女の恋愛に関する故事の使用が重要な役割を果たしていることがわかるのである。

李白の其二にも同様の特徴が見られ、男女の恋愛に関わる故事の使用は、李白「白頭吟二首」の大きな特徴であると言えるのであるが、多い少ないの違いはあれ、同じ特徴は、先に指摘したように鮑照や張正見の詩にも見られるものであった。

さて、では張籍の詩はどうかというと、先行する同題樂府のように、明らかに故事を踏まえたと言える表現はひとつも見当たらない。かろうじて5・6句において、漢の武帝に「金屋」を立ててもらつた阿嬌の故事(前述)が想起される程度で、これも李白のように明確に彼女の名前が出てくるわけではないのではつきりそうとは言えない。詩中で使われている語句は、女性を詠じた張籍以前の詩に用例の見えるものも多いが、あくまで用例であつて、故事を直接踏まえた表現は見られないのである。これが他の同題樂府との最も大きな違いである。

そしてこの故事を用いない表現方法がどのような効果を上げているかと言えば、たとえ過去に同様の経験をした女性が多くいたとしても、張籍の詩に詠われている宮女の境遇と嘆きは彼女一人のものであるという印象を与え、その孤独さや悲劇性がよりいっそう増していると言えるのではなからうか。先行する同題樂府のように、故事を用いて同様の境遇に置かれた女性を詠ずることは、女性の悲哀を普遍的なものにする一方、当の女性が抱く悲哀にリアリティを欠く結果となっている。李白の詩に至っては、多くの故事を用いているために女性が卓文君なのか阿嬌なのか、それとも別の女性なのか、宮女なのか別の境遇にある女性なのかあまり判然としない。それに対して張籍の描く宮女の境遇は明かであり、一人の女性の置かれた不遇な状況が浮か

び上がる。故事を用いないことで女性の孤独感がより深いものであると感じるのである。

張籍の詩にリアリティを感じる要因としてもう一つ指摘しておきたいのは、比喩の新しさである。

張籍の11句は、宮女が揚州産の銅鏡に自らを重ね、それが暗闇で用いられるというところで君王からの寵愛を失つたことを表現する。青銅の鏡が唐以前から女性の持ち物として詠われることは【語釈】ですでに述べたが、「揚州産の鏡」は、管見では唐以前の詩に詠われておらず、唐代も張籍より少し前の韋忠物「感鏡」と、同時代の白居易「新樂府・百練鏡」(ともに前掲)に詠われる程度である。揚州の銅鏡は詩の素材としては新しいものであり、張籍がそれを「白頭吟」のなかに詠み込んだと言えよう。

また、詩の結びは、君王の寵愛が二度と戻らないことを、月が永遠に丸いことと、菖蒲に花が咲くことに喩えている。この菖蒲の花が咲くこと(あるいは開いた花を目にすること)を「可能性がない」ことの喩えとするのは、【語釈】で示したように張籍以前にはほとんど見られないが、同様の比喩は中唐の頃になって詩に多く現れるようになるものである。

このように、張籍「白頭吟」の比喩表現は手垢の付いたものではなく、比較的近い時代の素材を使ったものや、また同時代に広く認識されるようになったものである。こうした表現は、同時代の読者に寵愛を失つた女性の悲しみが過去のことではなく今現に起こっていると感じさせ、先に確認した故事の不使用と同じく、女性の悲哀にリアリティを感じさせることに効果があつたと考えられる。(畑村)

30 將軍行

【題解】

將軍のうた。『樂府詩集』では卷九〇新樂府辭一の部分に、劉希夷の作とともに収める。その次には王維の「老將行」を収めるが、李建崑注は、それをも類似的の作としている。これらの作については、【補】の部分で触れることとする。

陳注は新樂府辭であると注するのみであるが、徐注は、吐蕃を撃つた郭子儀や渾瑊らのような、侵略に反対した民族的英雄を称え、自己の愛国の心情を述べた作とする。張修蓉『中唐樂府詩研究』も「新題新意」に分類した上で、異民族を滅ぼす功績を挙げた將軍を称える作であると説明している。

また張国光「唐樂府詩人張籍生平考証」(『全國唐詩討論會論文選』陝西人

民出版社、一九八四年)では、この詩は劉昌の事跡を描いた作であると指摘する。以下の語釈に記すように、この詩の表現には劉昌の事跡と重なる部分が多く、モデルとした人物がいるとすれば、劉昌と考えるのは妥当であろう。

ただ、この詩の主題の解釈については、検討の余地があるように思われる。この点についても、【補】の部分で詳しく述べることにした。

【本文・書き下し文】

- 1 彈箏峽東有胡塵 彈箏峽東 胡塵有り
- 2 天子擇日拜將軍 天子 日を択んで 將軍に拜す
- 3 蓬萊殿前賜六纛 蓬萊殿前 六纛を賜り
- 4 還領禁兵爲部曲 還た禁兵を領して 部曲と爲す
- 5 當朝受詔不辭家 朝に当たり 詔を受けて 家を辭せず
- 6 夜向咸陽原上宿 夜に 咸陽原上に向いて宿る
- 7 戰車彭彭旌旗動 戰車彭彭として 旌旗動き
- 8 三十六軍齊上隴 三十六軍 齊しく隴を上る
- 9 隴頭戰勝夜亦行 隴頭 戰勝して 夜も亦た行き
- 10 分兵處處收舊城 兵を分かち 処処 旧城を收む
- 11 胡兒殺盡陰磧暮 胡兒 殺され尽くして 陰磧暮れ
- 12 擾擾唯有牛羊聲 擾擾として 唯だ 牛羊の声有るのみ
- 13 邊人親戚曾戰沒 邊人の親戚 曾て戰没し
- 14 今逐官軍收舊骨 今 官軍を逐いて 旧骨を收む
- 15 磧西行見萬里空 磧西 行くゆく見る 万里の空しきを
- 16 幕府獨奏將軍功 幕府 独り奏す 將軍の功

【口語訳】

- 1 彈箏峽の東で 異民族の侵入が起こり
- 2 天子はよき日を択んで 將軍に任命する
- 3 蓬萊殿の前で 六纛を与えられ
- 4 さらに近衛兵を統率し 配下とした
- 5 朝廷で詔勅を受けると 家に別れも告げず
- 6 夜にはもう 咸陽原の上で宿営している
- 7 戰車は彭彭として 軍旗が移動し
- 8 三十六軍が 一斉に隴山を上る
- 9 隴頭で戦いに勝つても 夜も行軍を続け
- 10 兵力を分割して あちこちで 旧領地をも手中に収める

- 11 えびすどもは皆殺しにされ 陰気な砂漠は日が暮れて
- 12 ざわざわと乱れる 牛羊の声がするばかり
- 13 辺境の住民の親類は 昔戦死していたが
- 14 今やっと 官軍の後を追って 遺骨を拾うことができた
- 15 砂漠の西を歩みながら眺めても はるか彼方まで何も見えない
- 16 そして部下たちは ただ將軍の功績のみを天子に奏上するのだ

【押韻】

- 塵—上平—七真・軍—上平二〇文 (古詩通押)
 纛—入声二沃・曲—入声三燭・宿—入声一屋 (古詩通押)
 動—上声一董・隴—上声二腫 (古詩通押)
 行—下平—二庚・城・声—下平—四清 (『広韻』同用)
 沒・骨—入声—一沒
 空・功—上平—一東

※「纛」は一般には去声三七号の韻(徒到切、トウ)であるが、ここでは又音(徒沃切、トク)で押韻させたとと思われる。書き下し文のルビは「トウ」を用いておいた。

【語釈】

- 1・2 彈箏峽東有胡塵、天子択日拜將軍
 「彈箏峽東」彈箏峽は地名。現在の甘肅省平涼市の西という。李冬生注も引く『元和郡県図志』関内道、原州の平涼県の涇水の条に「涇水」又南流涇都盧山。山路之中、常如彈箏之声、故行旅因謂之彈箏峽」(又た南流して都盧山を経。山路の中、常に彈箏の声の如き有り、故に行旅 因りて之を彈箏峽と謂う)と記されている。類似した記述は、『太平寰宇記』三三、関内道原州の部分に引く『水経注』にも見え、北魏の頃にはすでにこの名がつけられていることが分かる。『中国歴史地図集 隋・唐・五代十国時期』(地図出版社、一九八二年)の京畿道・関内道の地図にも、この彈箏峽が記載されている。
 徐注および李冬生注が指摘するように、吐蕃と鳳翔隴右節度使の張鎰が盟して国境を定めた時、「涇州西至彈箏峽西口」(涇州の西より彈箏峽の西口に至るまで)をその一つとした。その経緯は新旧『唐書』の吐蕃伝および張鎰伝に詳しい。なお、これを両注は『旧唐書』張鎰伝に基づいて建中三年(782)のこととするが、同吐蕃伝によれば、翌建中四年になってからのことのようにある。これによれば、「彈箏峽東」は、唐の領土内ということになる。また、陳注にも引く『新唐書』劉昌伝に、この詩のモデルと目される涇原

節度使劉昌が、貞元七年(791)、「城平涼、開地二百里、扼彈箏峽」(平涼に城き、地を開くこと二百里、彈箏峽を扼う)という記述が見えている。

これらの記述からすれば、彈箏峽は、吐蕃との国境付近にある重要な防衛拠点として、当時の人々の注目を集めていたホットな場所であったと思われる。張籍はそれをいち早く詩の中に取り入れたのであろう。この地が選ばれたのには、さらに、彈箏という平和的な名前の場所に、異民族が侵入してきたという対比もあるのかもしれない。

この地名の詩における用例としては、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、他に儲光羲の「使過彈箏峽作」(『全唐詩』卷一三六)に「晨過彈箏峽、馬足凌兢行」(晨に過ぐ 彈箏峽、馬足 凌兢として行く)という例を見るのみのようである。

〔胡塵〕辺境地帯の砂塵の意味でも用いられるが、ここでは「塵」は戦場で舞い上がる塵。すなわち異民族による侵入を指す。

南齊の孔稚珪の「白馬篇」(『樂府詩集』卷六三)に「虜騎四山合、胡塵千里驚」(虜騎 四山に合し、胡塵 千里驚く)といい、北齊の裴讓之の「從北征詩」(『藝文類聚』卷五九)に「沙漠胡塵起、関山烽燧驚」(沙漠 胡塵起り、関山 烽燧驚かす)というなど、六朝の頃から辺塞詩にしばしば見える詩語。

唐に入ってから用例は多く、王無競の「北使長城」(『全唐詩』卷六七)に「胡塵未北滅、楚兵遽東起」(胡塵 未だ北に滅びざるに、楚兵 遽かに東に起る)といい、薛業の「洪州客舍寄柳博士芳」(『全唐詩』卷一一七)に「胡塵一起乱天下、何処春風無別離」(胡塵 一たび起りて 天下乱れ、何れの処の春風か 別離無からん)というなどの用例がある。後者は辺塞詩ではないが、『唐詩選』にも収められる有名な例である。

杜甫には「北征」(『詳註』卷五)に「況我墮胡塵、及婦尽華髮」(況んや我 胡塵に墮ち、婦に及んで 尽く華髮なるをや)というなど、全四例の用例がある。張籍の用例はこれのみ。

〔天子〕皇帝。天子。古くは経書から膨大な数の用例が見える常見の語。この詩の主人公である將軍への寵愛ぶりを描くために、主人公に先んじてここに登場する。

詩における用例も無数にあるが、ここでは辺塞を舞台とした樂府の中で將軍とともに用いられた例を挙げておこう。唐までの詩においては、梁の呉均の「戦城南」(『藝文類聚』卷五九)に「天子羽書勞、將軍在玉門」(天子羽書もて勞う、將軍の玉門に在るを)といい、梁の簡文帝の「從軍行」(『藝

文類聚』卷四二)に「將軍号令密、天子璽書催」(將軍 号令密に、天子 璽書催す)というなどの用例がある。唐に入って、駱賓王の「軍中行路難同辛常伯作」(『駱臨海集箋注』卷四)に「天子按劍徵余勇、將軍受賑事横行」(天子 劍を按じて 余勇を徵し、將軍 賑を受けて 横行を事とす)といい、劉希夷の「從軍行」(『全唐詩』卷八二)に「天子廟堂拜、將軍凶門出」(天子 廟堂に拜し、將軍 凶門より出づ)というなどの用例がある。特に駱賓王と劉希夷の例は、こと同じく天子によって將軍が任命されることを詠じたものである。

杜甫の三十例近い用例の中には、辺塞樂府における用例はないが、「送長孫九侍御赴武威判官」(『詳註』卷五)に「天子憂涼州、嚴程到須蚤」(天子 涼州を憂う、嚴程 到ること 須く蚤かるべし)というの、天子が辺境地帯の情勢を憂慮する例である。

張籍には他に十一例、そのうち²³¹「賀秘書王丞南郊撰將軍」(卷四)に「正初天子親郊礼、詔撰將軍領衛兵」(正初 天子 親しく郊礼し、詔して將軍を撰して 衛兵を領せしむ)というの、天子が王建を代理の將軍として任命したことを言祝ぐ例である。なお、22「永嘉行」(卷一)には「晋家天子作降虜、公卿奔走如驅羊」(晋家の天子 降虜と作り、公卿奔走すること 羊を驅るが如し)の句が見えた。その【語釈】をも参照。

〔択日〕よい日を選ぶ。吉日を選ぶ。

李冬生注も引く、『礼記』曾子問に「択日而祭於禰、成婦之義也」(日を択んで禰に祭るは、婦の義を成すなり)と見える、古いことば。ただ、詩における用例は少なく、張籍に先立つ例としては、初唐の盧從愿の「奉和聖製送張説巡辺」(『全唐詩』卷一一)に「占星引旌節、択日拜壇場」(星を占いて 旌節を引き、日を択んで 壇場に拜す)という一例を見るのみ。

〔拜將軍〕「拜」は任命すること。陳注は『後漢書』馬援伝に「於是璽書拜援伏波將軍」(是に於いて璽書して援を伏波將軍に拜す)という記述を引いている。

「將軍」も「天子」と同じく経書から頻繁に見える常見の語。用例はすでに多く挙げたので、詩中で「拜將軍」の形で用いた張籍に先立つ唯一の例を挙げておこう。韓休の「奉和御製平胡」(『全唐詩』卷一一)に「玉符徵選士、金鉞拜將軍」(玉符 選士を徵し、金鉞 將軍に拜す)の句がある。

「將軍」、杜甫の詩中の例は三十例を超える。その中で「傷秋」(『詳註』卷二〇)に「將軍思汗馬、天子尚戎衣」(將軍 汗馬を思い、天子 尚戎衣)という例は、「天子」とともに用いられている。

張籍の詩中の例は他に四例、一例は「天子」の語釈に挙げた。残る三例のうち、77「出塞」(卷二)に「秋塞雪初下、將軍遠出師」(秋塞 雪初めて下り、將軍 遠く師を出だす)という例などは、辺塞詩における用例である。

冒頭の二句、国境地帯の弾箏峡で異民族の侵入が起り、天子が吉日を選んで將軍を任命することを詠ずる。この二句で一韻であり、状況設定の二句であるといえよう。ここで天子が將軍を任命したことを詠じ、次の二句ではさらにそれを具体的に描写して承ける。

3・4 蓬萊殿前賜六纛、還領禁兵為部曲

〔蓬萊殿前〕「蓬萊殿」は大明宮にあつた宮殿の名。陳注は『六典』を引いて「大明宮に蓬萊殿有り」というが、『唐六典』には蓬萊殿の記述は見えないようだ。李冬生注は『雍錄』卷三「唐東内大明宮」の条に「大明宮地、本太極宮之後苑。…龍朔二年、高宗染風痺、惡太極宮卑下、故就修大明宮、改名蓬萊宮。取殿後蓬萊池為名也」(大明宮の地は、本太極宮の後苑なり。…龍朔二年、高宗 風痺に染り、太極宮の卑下なるを惡み、故に大明宮を修し、名を蓬萊宮と改む。殿後の蓬萊池を取りて名と為すなり)という記述を引いている。

平岡武夫編『唐代の長安と洛陽 地図篇』(唐代研究のしおり七、京都大学人文科学研究所、一九五六年)や葉驍軍編『中国都城歴史図録 第二集』(蘭州大学出版社、一九八六年)等に、様々な大明宮図が収められているが、蓬萊殿はそのほとんどに描かれている。

詩においては、杜審言の「泛舟送鄭卿入京」(『全唐詩』卷六二)に「帝坐蓬萊殿、恩追社稷臣」(帝は坐す 蓬萊殿、恩は追う 社稷の臣)といい、儲光羲の「京口留別徐大補闕趙二零陵」(『全唐詩』卷一三九)に「樹出蓬萊殿、城開闔闔門」(樹は出づ 蓬萊殿、城は開く 闔闔門)というなどの例もあるが、張籍が意識したのは、恐らく杜甫の「自平」(『詳註』卷二〇)に「蓬萊殿前諸主將、才如伏波不得驕」(蓬萊殿前の諸主將、才 伏波の如きも 驕るを得ず)という例であろう。南方の異民族に不穩な動きがあるため、蓬萊殿前の將軍たちに注意をうながすものである。この例に見られるように、蓬萊殿というのは、天子が將軍と謁見する場所とされていたようである。杜甫にはこの他二例の用例がある。張籍にはこの一例のみ。ただ、「蓬萊」の語は、17「求仙行」(卷二)に「蓬萊無路海無辺、方士舟中相枕死」(蓬萊路無く 海 辺無し、方士 舟中 相枕して死す)という一例があつた。その【語釈】も参照。

〔賜六纛〕天子から「六纛」をたまわつた。「賜」の文字は「たまう」「たまる」の両方の意味があり、天子が与えたと解しうるが、前の二句から韻が変わり、主語もここからは將軍になつてると解しておいた。

「六纛」は將軍が立てる六本の大きな旗。諸注も引く『旧唐書』職官志三の節度使の条に「受命之日、賜之旌節、謂之節度使。得以專制軍事、行則建節符、樹六纛」(命を受くるの日、之に旌節を賜えば、之を節度使と謂う。以て軍事を專制するを得、行けば則ち節符を建て、六纛を樹つ)という記述が見える。李冬生注は『演繁露』に、「古者天子六軍、諸侯三軍、今天子十二、諸侯六軍、故有六纛、以綏軍衆」(古は天子六軍、諸侯三軍。今は天子十二、諸侯六軍。故に六纛有り、以て軍衆を綏す)という記述も引いている。『全唐詩』に用例は他に二例のみ。同時期の元白に一例ずつで、陳注はそのうち白居易の「送令狐相公赴太原」(二六八五)に「六纛双旌万鉄衣、并汾旧路満光輝」(六纛 双旌 万の鉄衣、并汾の旧路 光輝満つ)という例を引く。河東節度使として太原に赴任する令狐楚について「六纛」の語を用いている。

〔領禁兵為部曲〕近衛兵を領有し指揮下においた。皇帝直属の兵を率いるということであり、皇帝の信頼と寵愛を表現した句といえよう。

「禁兵」は禁中の武器庫にある兵器の意味でも用いられるが、ここでは官廷を警護する兵士のこと。近衛兵。李冬生注は、『後漢書』耿弇伝に付する耿秉の伝に「帝每巡郡国及幸宮觀、秉常領禁兵宿衛左右」(帝 郡国を巡し及び宮觀に幸する毎に、秉 常に禁兵を領して左右に宿衛す)という記述を引いた上で、唐代の兵制においては、禁兵は南衛・北衛に分属しており、南衛に属するものを諸衛兵とし、北衛に属するものを禁軍としたと説明している。陳注は『舊唐書』職官志三の左右羽林軍の条に「羽林將軍、統領北衛禁兵之法令」(羽林將軍は、北衛の禁兵の法令を統領す)という記述を引いている。

唐までの詩においては、武器庫の兵器の用例が一例のみ。唐に入つて、初唐の宋之間の一例もやはり兵器の意味のようだ。盛唐には用例がなく、中唐になつて、顧況の「贈韋清將軍」(『全唐詩』卷二六七。卷四八三では李紳の「贈韋金吾」とする)に「身執金吾主禁兵、腰間宝劍重横行」(身は金吾を執りて 禁兵を 主り、腰間の宝劍 横行を重んず)という例が、近衛兵の意のようである。

張籍と交遊のあつた王建に二例、いずれも樂府の例で、一例を挙げれば「温泉宮行」(尹占華『王建詩集校注』卷一、巴蜀書社、二〇〇六年)に「禁兵去尽無射獵、日西麋鹿登城頭」(禁兵去り尽くして 射獵無く、日西すれば

麋鹿（ひぐめ） 城頭に登る」という句がある。近衛兵の姿が消えた驪山華清宮の様子を詠じ、その荒廃ぶりを描いた例である。

張籍にはもう一例、「洛陽行」に「六街朝暮鼓鑿鑿、禁兵持戟守空宮」（六街 朝暮 鼓鑿鑿たり、禁兵 戟を持ち 空宮を守る）という。長安に天子がいるため、主人のいない洛陽の宮殿を護衛する禁兵の様子を描いている。なお、「禁兵」の語は用いられていないが、先に挙げた²³¹「賀秘書王丞南郊撰將軍」（前出）に「正初天子親郊礼、詔撰將軍領衛兵」（正初 天子 親しく郊礼し、詔して將軍を撰して 衛兵を領せしむ）という例も、天子が近衛兵を統率させることを詠じて、天子の信頼が厚いことを表現した例である。

「部曲」はここでは軍隊・部隊の意。²⁴「傷歌行」（卷一）に「出門無復部曲隨、親戚相逢不容語」（門を出づるに 復た部曲の隨う無く、親戚 相い逢うも 語るを容れず）の句があった。その【語釈】参照。

前の二句を承けて、天子から「六纛」と「禁兵」を賜ったことを詠じた二句。天子の厚い信任ぶりと、戦いの準備が整ったことが描かれているといえよう。次の二句とともに同じ韻で一まとまりとなっており、その信任を一身に背負って出陣する様子を詠じた次の二句へとつながっている。

5・6 当朝受詔不辭家、夜向咸陽原上宿

〔当朝〕 朝廷において。「朝」は下の「夜」との対比であさの意でも解せそうだが、以下の用例を見る限りでは、朝廷の意のようである。

文章では、『文選』にも収められる『後漢書』逸民伝論に「自後帝德稍衰、邪孽当朝」（自後 帝德稍や衰え、邪孽 朝に当たる）という例がある。唐までの詩においては、北周の王褒の「牆上難為趨」（『樂府詩集』卷四〇）に「当朝少直筆、趨代皆曲鈞」（朝に当たって 直筆少なく、代を趨いて 皆な曲鈞なり）という一例をみるのみ。

唐に入つてやや用例が多くなり、蘇味道の「贈封御史入台」（『全唐詩』卷六五）に「凜凜当朝色、行行滿路威」（凜凜たり 朝に当たる色、行き行きて 路に満つる威）といい、張繼の「送張中丞歸使幕」（『全唐詩』卷二四二）に「獨受主恩歸、當朝似者稀」（獨り主恩を受けて帰るは、朝に当たって 似る者稀なり）というなどの用例がある。

杜甫には二例、一例を挙げれば、「投贈哥舒開府翰二十韻」（『詳註』卷三）に「開府當朝傑、論兵邁古風」（開府 朝に当たるの傑、兵を論じて 古に邁ぐる風あり）という句がある。張籍にはもう一例、¹³⁶「和裴司空即事通簡旧僚」（卷二）に「當朝奉明政、早日立元功」（朝に当たって 明政を奉じ、早日 元功を立てん）という。

〔受詔〕 みことのりを受ける。

『戦国策』等の古書から多くの文献に頻見することばであり、この詩のモデルとされる劉昌の伝でも、先に『新唐書』を引いた部分を、『旧唐書』では「受詔城平涼、以扼彈箏峽口」（詔を受けて平涼に城き、以て彈箏峽口を扼う）と記している。

ただ、詩における用例は少ない。唐までの詩では三例のみ、北周の庾信に「見征客始還遇獵」（『庾子山集注』卷三）に「貳師新受詔、長平正凱歸」（貳師 新たに詔を受け、長平 正に凱歸す）というなど二例、隋の王由礼の「賦得馬援詩」（『藝文類聚』卷五五）に「受詔金鞍動、論功銅馬成」（詔を受けて 金鞍動き、功を論じて 銅馬成る）という一例。

唐に入つて初盛唐の詩人に例が見えず、中唐においても張籍自身の²⁰⁴「送從弟徹東歸」（卷四）に「回程去在秋塵裏、受詔辭歸曉漏初」（回程 去るは 秋塵の裏に在り、詔を受けて 辭し歸る 曉漏の初め）というほかには例がなく、ほかに数例残っているのは晚唐詩人の例である。

〔不辭家〕 家に別れを告げることもしない。

陸機の「為顧彦先贈婦二首」其一（『文選』卷二四）に「辭家遠行遊、悠悠三千里」（家を辞して 遠く行遊し、悠悠たり 三千里）といい、陳注に引く鮑照の「擬行路難十八首」其十三（『鮑參軍集注』卷四）に「我初辭家從軍備、榮志溢氣干雲霄」（我 初め家を辞して 軍備に従うに、榮志 溢氣 雲霄を干す）というなど、詩においては、「辭家」のみでも決意を持つて家に別れを告げることが表現するのに用いられるが、ここではさらに進んで、家に別れも告げずに戦場に赴くことをいう。李建崑注も指摘するように、將軍が詔を受けてすぐに出発するという迅速さを表現したものである。

徐注は、唐の太宗が李世勣を豐州都督とした時、世勣が家に別れも告げずに赴任したという逸話を記す。『資治通鑑』卷一九九唐紀一五、貞觀二十三年（649）の条に「五月戊午、同中書門下三品李世勣為豐州都督。世勣受詔、不至家而去」（五月戊午、同中書門下三品李世勣を豐州都督と為す。世勣 詔を受け、家に至らずして去る）という。

「辭家」では、唐に入つても崔湜の「奉和送金城公主適西蕃制」（『全唐詩』卷五四）に「簫鼓辭家怨、旌旆出塞愁」（簫鼓 家を辞するの怨み、旌旆 塞を出づるの愁い）といい、高適の「燕歌行」（『全唐詩』卷二一三）に「漢家煙塵在東北、漢將辭家破殘賊」（漢家の煙塵 東北に在り、漢將 家を辞し 殘賊を破る）というなどの用例があり、岑參の「磧中作」（『校注』卷二）に「走馬西來欲到天、辭家見月兩回圓」（馬を走らせて 西來 天に到らん

と欲す、家を辞してより 月の両回^ま円かなるを見る」という例は特に名高い。ただ、杜甫には用例がなく、張籍にはこの例のみ。なお、「不辭家」の並びでは、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、用例がほかに見当たらないようだ。

〔夜向咸陽原上宿〕夜にはもう咸陽原の上で野営している。

「向」は「於」の意であろう。似た表現の例としては、顧況の「憶鄆陽旧遊」(『全唐詩』卷二六七)に「悠悠南国思、夜向江南泊」(悠悠たり 南国の思い、夜に 江南に向いて泊す)といい、王建の「荊門行」(『王建詩集校注』卷二)に「看炊紅米煮白魚、夜向雞鳴店家宿」(紅米を炊ぎ白魚を煮るを看、夜に 雞鳴店家に向いて宿る)という句がある。

「咸陽原」は原の名。諸書の注に「高平曰原」(高く平らなるを原と曰う)と見えるように、「原」は高くて平らな土地、すなわち台地、高台をいう。五丈原・樂遊原等が名高い。

「咸陽原」の名称は、『新唐書』地理志一、關内道の京兆府の咸陽県の条に、「有興寧陵、又有順陵、在咸陽原」(興寧陵有り、又順陵有り、咸陽原に在り)と見えている。興寧陵は唐の高祖李淵の父・李昞の墓。順陵は則天武后の母・楊氏の墓。地図で見ると限りでは、いずれも渭水の北岸、現在の咸陽市街地の北側に広がる台地の上にある。この辺りが咸陽原なのである。いわゆる漢の五陵がある台地である。

陳注は北宋の宋敏求の『長安志』卷一三によって、咸陽県は京兆府に属し、「畢原」があると説明する。四庫全書本『陝西通志』卷九、山川二、咸陽県の「畢原」の条によれば、咸陽原の別名が畢原ということである。なお『元和郡県志』卷一、關内道・京兆府・咸陽県の条に「畢原」があり、「原南北数十里、東西二三百里、無山川陂湖、井深五十丈。亦謂之畢陌、漢氏諸陵並在其上」(原は南北数十里、東西二三百里、山川陂湖無く、井は深さ五十丈なり。亦た之を畢陌と謂う。漢氏の諸陵 並びに其の上に在り)と記している。

徐注は、代宗の広徳元年(763)に吐蕃が入寇した時、郭子儀らに咸陽で守備に当たらせたと記している。『資治通鑑』(卷二二三、唐紀三九)の当該部分を引いておこう。

吐蕃の入寇也、辺將告急、程元振皆不以聞。冬十月、吐蕃寇涇州、刺史高暉以城降之、遂為之鄉導、引吐蕃深入。過邠州、上始聞之。辛未、寇奉天・武功、京師震駭。詔以雍王适為關内元帥、郭子儀為副元帥、出鎮咸陽以禦之。

吐蕃の入寇するや、辺將 急を告ぐるも、程元振 皆な以て聞せず。冬十

月、吐蕃 涇州を寇し、刺史高暉 城を以て之に降り、遂に之が為に郷導し、吐蕃を引き深く入らしむ。邠州を過ぎ、上 始めて之を聞く。辛未、奉天・武功を寇し、京師震駭す。詔して雍王适を以て關内元帥と為し、郭子儀を副元帥と為し、出でて咸陽に鎮して以て之を禦がしむ。

原州の弾箏峽から侵入して長安へ向かうには、この時の吐蕃のように、涇州から邠州を経て京兆府の奉天・武功等にいたるルートを通るのが最短距離のようである。郭子儀が咸陽で守備に当たったように、この詩で將軍が咸陽原方面に向かっているのは、自然な対応といえるであろう。もっとも、この詩の將軍はこの後さらに隴頭へと進軍する。

また、原上という高所を宿営の地に選んでいるのは、『孫子』行軍篇にいう「凡軍好高而惡下」(凡そ軍は高きを好んで下きを惡む)という原則を遵守しているのであろうか。

「咸陽」は詩における用例が多いが、「咸陽原」は中唐までの詩に用例が見えない。中晩唐にも例は少なく、この他に詩中には三例の用例を見るのみである。その中で、同時期の元稹に「聽庾及之彈烏夜啼引」(『元稹集』卷九)に「當時為我賽烏人、死葬咸陽原上地」(當時 我が為に 烏に賽いし人、死して葬らる 咸陽原上の地)というなど二例の用例があるのは、妻の韋叢が咸陽原に葬られたためのものである。

なお、張籍は91「登咸陽北寺樓」(卷二)でも「高秋原上寺、下馬一登臨」(高秋 原上の寺、馬より下りて 一たび登臨す)と、「原上」の語を用いて表現している。また、友人の王建は大和中に陝州司馬として塞外に従軍し、「數年後、歸卜居咸陽原上」(數年後、歸りて咸陽原上に卜居)している(『唐才子伝』卷三)。

この詩の將軍は、朝廷で將軍に任命されて前線へと赴いているが、この詩のモデルとされる劉昌の場合は、新旧『唐書』の伝によると、貞元三年に京西北行營節度使となつて、「歲餘、授涇州刺史、充四鎮北庭行營、兼涇原節度支度營田等使。昌躬率士衆、力耕三年、軍食豐羨、名聞闕下」(歲餘にして、涇州刺史を授けられ、四鎮北庭行營に充てられ、涇原節度支度營田等使を兼ね。昌躬ら士衆を率い、力耕すること三年、軍食豐羨にして、名は闕下に聞こゆ)『旧唐書』とあり、ずっと涇州に赴任していたようである。

前の二句で天子からの厚い信任と戦闘準備の完了を詠じたのを受け、命を受けるやただちに陣し、咸陽原まで進軍したことを描写した二句。以上四句でひとまとまりである。ここで野営して戦闘に備えることを述べ、換韻し

た次の二句で戦闘の開始が描かれる。

7・8 戦車彭彭旌旗動、三十六軍齊上隴

〔戦車〕戦車。『晏子春秋』『戦国策』等から見える古くからあることばだが、詩中の用例は極めて少なく、唐までの詩においては、鮑照の「建除詩」〔鮑參軍集注〕卷六に「除去徒与騎、戦車羅万箱」〔徒と騎とを 除去し、戦車 万箱を羅ぬ〕という例を見るのみ。『全唐詩』には張籍のこの句以外に例が見えないようだ。

〔彭彭〕擬態語。車の進む様子が盛んであることを形容する。

陳注、『毛詩』齊風「載駟」に「汶水湯湯、行人彭彭」〔汶水 湯湯たり、行人 彭彭たり〕という例を引く。毛伝にもいうように、これは通行人の多い形容であり、小雅「出車」に「出車彭彭、旌旄央央」〔車を出だすこと 彭彭たり、旌旄 中央たり〕という例の方がふさわしいであろう。軍勢の盛んなことを車と旗によって表現したもので、この句と共通している。

ただ、後にはあまり用例がないようで、詩においても、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、この一例のみのようである。

〔旌旗〕はた。旗の総称。古くは『周礼』や『墨子』等から、非常に多くの用例がある。

詩においても多くの用例があるうち、軍旗に用いた例を挙げておこう。唐までの詩においては、曹丕の「董逃行」〔『太平御覽』卷三三九〕に「戈矛若林成山、旌旗弘日蔽天」〔戈矛 林の若く 山を成し、旌旗 日を払い 天を蔽う〕といい、顔延之の「從軍行」〔『樂府詩集』卷三二〕に「羽駟馳無絶、旌旗昼夜懸」〔羽駟 馳せて絶ゆる無く、旌旗 昼夜に懸く〕というなどの例がある。

唐に入ってから、李適の「汾陰后土祠作」〔『全唐詩』卷七〇〕に「勒兵十八万、旌旗何紛紛」〔兵を勒むること 十八万、旌旗 何ぞ紛紛たる〕といい、劉希夷の「入塞」〔『全唐詩』卷八二〕に「霜雪交河尽、旌旗入塞飛」〔霜雪 河に交わりて尽き、旌旗 塞に入りて飛ぶ〕というなど、多くの例がある。陳注は、王昌齡の「青樓曲二首」其一〔『全唐詩』卷一四三〕に「白馬金鞍從武皇、旌旗十万宿長楊」〔白馬 金鞍 武皇に従い、旌旗十万 長楊に宿す〕という、『唐詩選』にも収められる有名な例を引く。

杜甫には十例の用例があるうち、「魏十四侍御就弊廬相別」〔『詳註』卷一〇〕に「入幕旌旗動、帰軒錦繡香」〔入幕 旌旗動き、帰軒 錦繡香し〕という例は、この句と同じく「旌旗動」の形で用いている。

張籍には他に一例、71「送防秋將」〔卷二二〕に「元戎選部曲、軍吏換旌旗」〔元戎 部曲を選び、軍吏 旌旗を換う〕の句がある。

〔三十六軍〕徐注、この三十六というのは「虚数」であって、数は三に成り〔『史記』律書等に見える〕、その三の倍が六、六を相乗すると三十六になるため、「三十六鴛鴦」・「三十六陂」といったことばがあるのであり、この「三十六軍」というのも同じようなものであると説明する。他の諸注にも同様の指摘がある。

張籍が意識したのは、あるいは漢の景帝の三年（紀元前154）に起きた呉楚七国の乱の時、周亜夫が「三十六將軍」〔『史記』呉王濞列伝等〕を率いて呉楚を討つたことであろうか。この事件を、例えば後漢の荀悦の『漢紀』孝景の条では「絳侯周勃子亜夫為太尉、將三十六軍擊呉楚」〔絳侯周勃の子の亜夫を太尉と為し、三十六軍を將いて呉楚を撃たしむ〕と「三十六軍」と表現している（他に「元和郡縣圖志」河南道・兗州・金郷縣の条なども同じ）。

「三十六軍」ということばの例としては、ほかに『晋書』楚王瑋伝に「遂勒本軍、復矯詔召三十六軍」〔遂に本軍を勒め、復た詔を矯りて三十六軍を召す〕といい、『唐会要』卷九五「高句麗」の条に「竜朔元年四月十六日、兵部尚書任雅相為江道行軍大總管三十六軍と為す」というなどの例が見える。

詩においては、「三十六宮」「三十六峰」等の例はあるが、「三十六軍」の例は、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、ほかに見当たらないようだ。軍隊に関する例としては、同時期の柳宗元の「古東門行」〔『柳宗元集』卷四二〕に「漢家三十六將軍、東方雷動橫陣雲」〔漢家 三十六將軍、東方雷動して 陣雲横たわる〕の句がある。これは周亜夫の故事に基づくようである。

〔齊上隴〕一斉に隴山を攻め上つてゆく。

「隴」は隴山。現在の陝西省と甘肅省の境界をなす山岳地帯。陳注が『輿地広記』を引いて記すように、唐代においては関内道に属した。冒頭の弾箏峽もこの山岳地帯の一部といえよう。

古来、関中と塞外を分かつ場所として、数多くの詩に詠じられていること、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）の「名詩のふるさと（詩跡）」（植木久行氏執筆）の「隴山・隴水」の条に詳しい。

詳細はそれに譲ることとし、ここでは「隴」を「上」と表現した詩の例をいくつか挙げておこう。唐までの詩においては、鮑照の「擬古八首」其七〔『鮑參軍集注』卷六〕に「聞君上隴時、東望久歎息」〔聞く 君の隴を上りし時、東望して 久しく歎息すと〕といい、「隴阪」の形ではあるが、梁の

鼓角横吹曲の「隴頭流水歌辞」三首其二(『樂府詩集』卷二五)に「西上隴阪、羊腸九回」(西のかた隴阪を上れば、羊腸として九回す)というなどの例がある。

唐に入り、「隴阪」の形で虞世南の「出塞」(『全唐詩』卷三六)に「揚桴上隴阪、勒騎下平原」(桴を揚げて、隴阪を上り、騎を勒めて、平原に下る)といい、皇甫曾の「送和西蕃使」(『全唐詩』卷二一〇)に「雨雪從辺起、旌旗上隴遥」(雨雪、辺より起り、旌旗、隴を上りて遥かなり)というなどの例がある。

杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

なお、『唐詩紀事』卷三四では、「声上隴」(声、隴を上る)に作っている。こちらであれば、関の声を上げながら隴山を登っていくということになるのか。

二句で一韻。いよいよ戦闘が開始する。この二句は、戦車と旗の動きによって、一斉攻撃を加える様子が描かれる。三十六軍が一斉に隴山を攻め上っていく様子は、スペクタクル映画の一シーンを思わせる。「戦車」「彭彭」「三十六軍」と、あまり詩に用例が見られないことばを連ねているのは、戦場の様子を散文的に直叙して臨場感を持たせる効果をねらったものであるうか。

9・10 隴頭戦勝夜亦行、分兵処処收旧城

〔隴頭〕隴山のあたり。また隴山の辺りの川を隴水・隴頭水と呼んだ。前掲『漢詩の事典』に詳しい。

先に引いた「隴頭流水歌辞」三首(前出)の其一にも「隴頭流水、流離西下」(隴頭の流水、流離して、西に下る)という句があるが、さらに古くから「隴頭歌」「隴頭水」等の樂府題が用いられている。詩題のみならず、詩中にも多くの用例がある。

張籍にも414「隴頭」(巻七)の作があるほか、27「関山月」(巻一)にも「隴頭風急雁不下、沙場苦戦多流星」(隴頭、風急にして、雁下らず、沙場の苦戦、流星多し)の句が見えた。その【語釈】も参照。

ここでは、多くの「隴頭」の例の中から、樂府の中で軍事に関連して用いられた例を挙げておこう。唐までの詩においては、梁の劉孝威の「隴頭水」(『樂府詩集』卷二二)に「従軍成隴頭、隴水帶沙流」(従軍して、隴頭に成れば、隴水、沙を帯びて流る)といい、陳の後主の「隴頭」(同前)に「隴頭征戍客、寒多不識春」(隴頭、征戍の客、寒多くして、春を識らず)というなどの用例がある。

唐に入って、孔紹安の「結客少年場行」(『全唐詩』卷三八)に「結客佩吳

鉤、横行度隴頭」(客と結んで、吳鉤を佩び、横行して、隴頭に度る)の句があり、李白(王注本卷五)の「塞下曲六首」其二に「握雪海上餐、抔沙隴頭寢」(雪を握って、海上に餐し、沙を抔って、隴頭に寝ぬ)の句がある。

〔戦勝〕戦いに勝つ。戦勝する。

陳注は「孟子」公孫丑下の「故君子有不戰、戰必勝矣」(故に君子は戦わざる有り、戦えば必ず勝つ)の語を引く。「戦勝」の形でも「国語」や「老子」から見える古いことば。

詩における例としては、謝靈運の「初去郡」(『文選』卷二六)に「戦勝驪者肥、鑑止流帰停」(戦い勝ちて、驪せる者は肥え、止まるに鑑みて、流れは停に帰す)の句が見え、謝朓の「觀朝雨」(『文選』卷三〇)に「方同戦勝者、去翦北山菜」(方に、戦勝の者に同じうし、去りて、北山の菜を翦らん)の句が見えるなどの用例がある。これらは故事に基づいて、道義を求める心が榮達を求める心との戦いに勝つという例。

唐に入っても心の葛藤や科擧の合格に関して用いる例が多い中、杜甫の二例のうち「対雨」(『詳註』卷二二)に「雪嶺防秋急、繩橋戦勝遲」(雪嶺防秋急に、繩橋、戦勝遅し)という例は、実際の戦争に関して用いたものである。

張籍にはこの例のみ。

〔夜亦行〕夜も行軍をやめない。

「夜亦行」という表現の例は他に見えないようだが、夜の軍事行動を詩に詠ずる例はしばしば見えているようなので、いくつかを挙げておこう。梁の簡文帝の「雁門太守行二首」其二(『樂府詩集』卷三九)に「潜師夜接戦、略地晝摧鋒」(師を潜めて、夜に戦いを接し、地を略して、晝に鋒を摧く)といい、崔国輔の「従軍行」(『全唐詩』卷一九)に「夜里偷道行、將軍馬亦瘦」(夜里、道を偷んで行き、將軍、馬も亦た瘦す)といい、王昌齡の「従軍行七首」其五(『全唐詩』卷一四三)に「前軍夜戰洮河北、已報生擒吐谷渾」(前軍、夜に戦う、洮河の北、已に報ず、生きながら吐谷渾を擒う)というなどの例がある。

張籍の作では、27「関山月」(巻一)に、夜に乗じて攻めてくる胡兵に備え、暮れに斥候を送り、闇の中に伏兵をひそませる様子が描かれていた。

〔分兵〕兵を分かつ。兵力を分散させる。前の二句では三十六軍の一斉攻撃であったが、ここでは兵力を分けて個別に撃破する。

古く「吳子」料敵篇に「若凡此者、選銳衝之、分兵繼之、急擊勿疑」(凡

そ此くの若き者は、鋭を選んで之を衝き、兵を分かちて之に継ぎ、急ぎ撃ちて疑う勿かれ」と見え、また『史記』酈食其伝にも「楚人聞淮陰侯破趙、彭越数反梁地、則分兵救之」（楚人 淮陰侯が趙を破り、彭越が数しば梁の地に反するを聞き、則ち兵を分かちて之を救う）という例がある。また、『旧唐書』劉昌伝にも、「分兵援成」（兵を分かちて援け成る）の表現が見える（後述）。

唐までの詩には、鮑照の「出自薊北門行」（『文選』卷二八）に「徵騎屯広武、分兵救朔方」（騎を徵して 広武に屯し、兵を分かちて 朔方を救う）という一例のみであるが、『文選』に収められる有名な作品である。

唐に入つて、李嶠の「餞薛大夫護辺」（『全唐詩』卷六一）に「授律星芒動、分兵月暈空」（律を授けて 星芒動き、兵を分かちて 月暈空し）といい、王昌齡の「塞上曲」（『全唐詩』卷一四〇）に「五道分兵去、孤軍百戰場」（五道 兵を分かちて去り、孤軍 百戦の場）というなどの用例が見える。杜甫には用例がなく、張籍の用例はこれのみ。

〔処処〕あちこち。いたるところで。上の「分兵」と呼応する表現。

「帰路煙霞晚、山蟬処処吟」（帰路 煙霞の晚、山蟬 処処に吟ず）沈佺期「遊少林寺」（『全唐詩』卷九六）や「春眠不覺曉、処処聞啼鳥」（春眠 曉を覺えず、処処 啼鳥を聞く）孟浩然「春曉」（『全唐詩』卷一六〇）等の用例がただちに想起される常見の語であるが、經書や諸子百家の書には見えないようだ（『毛詩』に一例見えるのは用法が異なる）。『漢書』の遊俠伝に見える例が早いものようである。

詩においても、魏詩には見えず、晋になつて、民歌の「子夜四時歌七十五首」秋歌十八首其十二（『梁府詩集』卷四四）に「処処種芙蓉、婉轉得蓮子」（処処 芙蓉を種え、婉轉として 蓮子を得たり）という例が見えている。晋のもう一例は帛道猷の仏教的な詩の例であり、文人が詩中に用いたものとしては、謝朓の「和刘西曹望海臺」（『謝宣城集校注』卷四。一説に鍾憲の作という）に「往往孤山映、処処春雲生」（往往 孤山映じ、処処 春雲生ず）という例が最も早いものの一つのものである。梁以後には、多くの用例が見られるが、陳の蔡凝に「賦得処処春雲生詩」（『初学記』卷一）があるように、この謝朓の句の影響があつたのかもしれない。

唐詩の例は先に引いた。杜甫には全十七例が見えるようだが、「秋興八首」其一（『詳註』卷一七）に「寒衣処処催刀尺、白帝城高急暮砧」（寒衣 処処 刀尺を催す、白帝城高くして 暮砧急なり）という例は、『唐詩選』に選ばれて我が国でも名高い。

張籍には他に五例、そのうち 355 「寄李渤」（卷六）に「春山処処行応好、

一月看花到幾峰」（春山 処処 行きて応に好かるべし、一月 花を看て幾峰にか到る）という例は、『三体詩』にも収められる張籍の代表作の一つ。

〔取旧城〕もとの領地まで回復した。

「旧城」は、もとの城市、歴史ある都市、古びた町といった色々なニュアンスで用いられることばのようだ。ここでは、もと唐の領土であった町の意であろう。ここでは、その旧城を手中にしたといっているが、前の部分に隴頭で戦勝してからも行軍を続けることを述べ、後の部分にかつての戦没者の遺骨を回収することを述べていることからすれば、このたびの異民族の侵入によって占領された町ばかりでなく、ずっと以前に唐の領土であった都市をも奪い返したということであろう。

「旧城」の用例としては、班彪の「北征賦」（『文選』卷九）に「登赤須之長坂、入義渠之旧城」（赤須の長坂に登り、義渠の旧城に入る）という句がある。これは、もと異民族の国であり、後に秦に滅ぼされた義渠の地を「旧城」と呼んだものようだ。

唐までの詩においては、謝朓の「侍筵西堂落日望郷」（『謝宣城集校注』卷五）の聯句（何從事担当部分）に「旧城望已肅、况乃客悠悠」（旧城より望めば已に肅たり、況んや乃ち 客の悠悠たるをや）と見えるのが唯一の例のようである。これは宣城の町を旧城と呼んだものとされる（森野繁夫博士『謝宣城詩集』白帝社、一九九一年）。

唐に入つて、崔湜の「江樓夕望」（『全唐詩』卷五四）に「公子留遺邑、夫人有旧城」（公子 遺邑を留め、夫人 旧城有り）といい、劉長卿の「雜詠八首上礼部李侍郎」其六「旧井」（『全唐詩』卷一四八）に「旧井依旧城、寒水深洞徹」（旧井 旧城に依り、寒水 深くして洞徹す）というなどの用例がある。前者は、東晋の頃に前秦軍に包囲された襄陽で、守備隊の將軍の母が、子のために城壁を増築して「夫人城」と呼ばれたという故事を用いており、その古い城壁のことを「旧城」と呼んだもの。後者は行巻の詩とされておられる（儲仲君氏『劉長卿詩編年箋注』中華書局、一九九六年）、古びた町というような意味で用い、荒れ果てた町古井戸によって自分のことを喩えているのであろう。

杜甫には用例はなく、張籍はこの一例のみ。

この詩の將軍は、隴山を越えてさらに西に進軍していくが、モデルとされる劉昌も、『新唐書』の伝では、先に引いた、平涼を築き彈箏峽を押さえたという記述に続き、「又西築保定、扞青石嶺、凡七城二堡、旬日就。以功檢校尚書右僕射、累封南川郡王」（又た西のかた保定を築き、青石嶺を扞ぎ、

凡そ七城二堡、旬日にして就る。功を以て檢校尚書右僕射たり、南川郡王に累封せらる」と記されている。これによれば、さらに西に城市やとりでを築いたように見える。

ただ、『旧唐書』の同じ部分には、「昌命徒庀事、旬餘而畢。又於平涼西別築胡谷堡、名曰彰信。平涼当四会之衝、居北地之要。分兵援戍、遏其要衝、遂以保寧辺鄙、加檢校右僕射」(昌 徒だ庀う事を命じ、旬餘にして畢む。又た平涼の西に於いて別に胡谷堡を築き、名づけて彰信と曰う。平涼は四会の衝に当たり、北地の要に居る。兵を分かちて援け成り、其の要衝を遏め、遂に辺鄙を保寧し、檢校右僕射を加えらる)と記される。

さらに『資治通鑑』では「戊戌、詔涇原節度使劉昌築平涼故城、以扼彈箏峽口。浹辰而畢、分兵戍之。昌又築朝谷堡、甲子、詔名其堡曰彰信。涇原稍安」(戊戌、涇原節度使劉昌に詔して平涼の故城を築き、以て彈箏峽口を扼えしむ。辰を浹りて畢わり、兵を分かちて之を戍る。昌又た朝谷堡を築き、甲子、詔して其の堡に名づけて彰信と曰う。涇原稍安んず)と記されている。

胡谷堡・朝谷堡と文字の異同はあるが、『旧唐書』に胡谷堡を平涼の西といい、『資治通鑑』の胡三省注に朝谷堡は「東距平涼三十五里」(東のかた平涼より距たること三十五里)というように、はっきりしないながらも涇州の平涼付近のことであるとされている。すなわちいずれも彈箏峽や隴山より東ということになって、この詩の將軍が異民族の領地に攻め込んだと描写しているのとは異なり、異民族の領土に接する地帯の守りを固めたことになる。また、『新唐書』の記述でも、保定が涇州保定県のことであるとすれば、これは平涼より東となる。

一方で、『新唐書』に見えた「青石嶺」について、『資治通鑑』胡三省注では、卷二二四の大曆六年九月の条では「在原州西」(原州の西に在り)と注し、卷二二五の大曆十三年九月の条では「在涇州保定県西」(涇州保定県の西に在り)と注している。涇州保定県の西であれば彈箏峽や隴山の東となるが原州の西であれば、彈箏峽や隴山より西ということになり、保定の問題はあるにせよ、『新唐書』の記述にも、何か基づくところがあった可能性もある。また、辺境地帯の細かい地理なので、詳しい情報が伝えられていなかっただけの可能性もある。

先にも見たように、劉昌とこの詩の將軍とは、事跡が完全に一致しているわけではなく、この部分も張籍の自由な発想による表現と考えれば、あまり穿鑿する必要はないかもしれないが、劉昌をモデルにしたとすれば、何らかの資料に基づいてこのように表現したのかもしれない。

一斉攻撃を詠じた前の二句を承けた二句、換韻して次の二句と同じ韻でひ

とまとまりとなる。隴山の戦闘で勝利をあげても攻撃の手をゆるめず、さらに進軍する様子が描かれる。前の二句が一斉攻撃であったのに対し、ここでは分散攻撃。夜も進軍を続ける奮闘ぶりでもとの領地を奪還することを描写し、次の二句の描写へとつながっていく。

11・12 胡兒殺尽陰積暮、擾擾唯有牛羊声

〔胡兒〕異民族に対する蔑称。22「永嘉行」(卷一)に「黄頭鮮卑入洛陽、胡兒持戟升明堂」(黄頭の鮮卑、洛陽に入り、胡兒 戟を持ち 明堂に升る)、27「関山月」(同前)に「海辺茫茫天氣白、胡兒夜度黄龍磧」(海辺 茫茫として 天氣白く、胡兒 夜に黄龍の磧を渡る)の句が見えた。その【語釈】参照。

〔殺尽〕皆殺しにする。ここでは胡兒が主語の位置にあるので、下に引く「国殤」や張籍のもう一例も参考にし、受け身で訓読しておいた。

古く『楚辞』九歌「国殤」に「天時墜兮威靈怒、敵殺尽兮棄原壘」(天時墜つるも 威靈怒り、敵として殺され尽くして 原壘に棄てらる)という例が見えるが、詩における用例は少なく、唐までの詩には見えない。

唐に入っても、張籍に先行する例は、李白の「草書歌行」(王本卷八)に「墨池飛出北溟魚、筆鋒殺尽中山兔」(墨池 飛び出づ 北溟の魚、筆鋒 殺し尽くす 中山の兔)という一例が見えるのみ。

張籍には他に一例、417「塞上曲」(卷七)に「年年征戰不得閑、辺人殺尽唯空山」(年年 征戰 閑なるを得ず、辺人 殺され尽くして 唯だ空山)という。

〔陰積〕陰気な砂漠をいうのであろう。

用例は極めて少ないようで、以前の用例は見当たらない。諸注も引く、同時代の張仲素の「塞下曲五首」其五(『全唐詩』卷三六七)に「陰積茫茫塞草肥、枯・烽上暮雲飛」(陰積茫茫として 塞草肥え、枯・烽の烽上がり 暮雲 飛ぶ)という例がある。

張籍にはもう一例、69「征西将」(卷二)に「深山旗未展、陰積鼓無声」(深山 旗は未だ展べず、陰積 鼓に声無し)と用いている。

〔擾擾〕多いこと・入り乱れることを形容する疊語。ここでは牛羊の声を形容している。

古く『莊子』『列子』等に見えることばで、詩においても、潘岳の「河陽県作二首」其二(『文選』卷二六)に「摠摠都邑人、擾擾俗化訛」(摠摠たり

都邑の人、擾擾たり 俗化の訛り」といい、陳注も引く鮑照の「行樂至城東橋」(『文選』卷二二)に「擾擾遊宦子、營營市井人」(擾擾たり 遊宦の子、營營たり 市井の人)というなど、多くの例がある。

唐に入ってから、王勃の「出境遊山二首」其二(『全唐詩』卷五六)に「蕭蕭離俗影、擾擾望鄉心」(蕭蕭たり 俗を離るるの影、擾擾たり 郷を望むの心)といい、李白の「古風五十九首」其十七(王注本卷二)に「不知繁華子、擾擾何所迫」(知らず 繁華の子、擾擾として 何の迫る所ぞ)というなど、多くの用例がある中、蔣列の「經理輪地」(『全唐詩』卷二五八)に「下馬獨太息、擾擾城市喧」(馬より下りて 独り太息す、擾擾として 城市 喧し)という例は、このことと同じく音に関する例といえようか。

杜甫には用例がなく、張籍にはもう一例。226「寄梅処士」(卷四)に「擾擾人間是与非、官閑自覺省心機」(擾擾たり 人間の是と非と、官閑なれば自ら覚ゆ 心機を省くを)という句がある。

〔唯有牛羊声〕牛羊の声が聞こえるばかり。

「牛羊」は、牛や羊。22「永嘉行」(卷一)に「晋家天子作降虜、公卿奔走如驅羊」(晋家の天子 降虜と作り、公卿奔走すること 羊を驅るが如し)の句があり、「如驅羊」を「如牛羊」に作るテキストがあった。その【語釈】参照。なお陳注は『毛詩』王風「君子于役」に「日之夕矣、羊牛下来」(日の夕べ、羊牛 下り来たる)を「牛羊」として引いている。

ここで牛羊が描かれることについて、徐注は、胡は遊牧民族であるから、胡人が皆殺しにされて、軍隊が従えてきていた牛羊も捕らえられるのである旨注しているが、隴山を越えて異民族の居留地に攻め込んできているのであるから、胡軍が連れてきたものと考えた必要はないのではないか。

前の二句でもとの領地を手中にしたことを詠じたのを承け、この二句では戦場の終わった戦場の様子を描写する。敵兵が皆殺しにあり、牛や羊の声だけが聞こえるという描写は、「陰磧」の語ともあいまって陰鬱なイメージであるが、戦争の悲惨さを暗示するというようなものではない。例えば李白の「塞上曲」(王注本卷五)でも、戦鬪の終わった西域の風景を「蕭条万里清、瀚海寂無波」(蕭条として 万里清み、瀚海 寂として波無し)と、やや寂しげな表現で描写している。

13・14 辺人親戚曾戰没、今逐官軍收旧骨

〔辺人〕辺境地帯に住む人々。また、辺境地帯を守る人々。辺境地帯の守備兵は、平時は農耕を営んで生活していたであろうから、両者に明確な区別が

ある訳ではなからう。

『春秋』昭公二十四年の『左伝』に「呉人踵楚、而辺人不備」(呉人 楚を踵めども、辺人 備えず)というなどの例が見える、古くからあることだが、唐までの詩においては、この二字でまとまる用例は見えない。

唐に入ってから、陳子昂の「感遇詩三十八首」其三十七に「咄嗟吾何歎、辺人塗草萊」(咄嗟として 吾何をか歎く、辺人 草萊に塗る)といい、李白の「古風五十九首」其十四(王注本卷二)に「李牧今不在、辺人飼豺虎」(李牧 今在らず、辺人 豺虎に飼たり)というなどの用例が見えるようになる。杜甫にはこの二字でまとまる例は一例、「後出塞五首」其四(『詳註』卷四)に「辺人不敢議、議者死路衢」(辺人 敢えて議せず、議する者は 路衢に死す)の句がある。これは、安祿山配下の漁陽の兵士が、主である安祿山の横暴を批判できないことを詠じた例である。

張籍には他に二例、一例は先に「殺尽」の語釈に引いた417「塞上曲」(前出)に見えた。もう一例は、414「隴頭行」(卷七)に「驅我辺人胡中去、恣放牛羊食禾黍」(我が辺人を驅って 胡中に去かしめ、恣に牛羊を放ちて 禾黍を食らわしむ)と、異民族の捕虜となつて放牧をさせられる辺境守備兵を詠じた例がある。

〔親戚〕親族。24「傷歌行」(卷一)に「出門無復部曲隨、親戚相逢不容語」(門を出づるに 復た部曲の隨う無く、親戚 相い逢うも 語るを容れず)の句があった。その【語釈】参照。

〔曾戰没〕以前戦死した。

「戰没(歿)」は、『後漢書』光武帝紀の建武元年十二月の条に「破虜大將軍叔寿擊五校賊於曲梁、戰歿」(破虜大將軍叔寿 五校の賊を曲梁に撃ち、戦歿す)というなど、歴史書などには例が見えるが、詩においては、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、他の用例を見ない。

〔今逐官軍收旧骨〕今やつと、官軍に従って昔の遺骨を拾うことができた。「官軍」は、朝廷側の正規軍。ここでは主人公である將軍の率いる軍隊をいう。

『論衡』解除篇に「盜賊攻城、官軍擊之」(盜賊 城を攻め、官軍 之を撃つ)というなど、散文や歴史書には用例があるが、詩における例は少なく、唐までの詩においては、隋の民謡に二例見えるのみ。

唐に入っても、初唐には見えないが、盛唐になって、岑参の「獻封大夫破播仙凱歌六章」第二章(『校注』卷二)に「官軍西出過樓蘭、營幕傍臨月窟

寒」(官軍 西に出でて 樓蘭を過ぎ、營幕 傍ら 月窟に臨んで寒し)と
いい、高適の「同呂判官從哥舒大夫破洪濟城迴登積石軍多福七級浮圖」(『全
唐詩』卷二二二)に「大將何英靈、官軍動天地」(大將 何ぞ英靈なる、官
軍 天地を動かす)というなど、用例が多くなる。

杜甫の詩中に七例、陳注は「喜聞官軍已臨賊境二十韻」(『詳註』卷五)に
「胡騎潛京東、官軍擁賊壕」(胡騎 京東に潛み、官軍 賊壕を擁す)の例
を引く。

張籍にはもう一例、418「董逃行」(卷七)に「聞道官軍猶掠人、旧里如今
歸未得」(聞道く官軍 猶お人を掠むと、旧里 如今 歸ること未だ得ず)
という。この例においては、敗走して非道を働く官軍が描かれている。

「収旧骨」は、以前死んだ兵士の遺骨を拾うことであろう。陳注は『春秋』
僖公三十二年の『左伝』に、「必死是間、余収爾骨焉」(必ず是の間に死せん、余
爾の骨を収めん)という例を引く。

唐までの詩・『全唐詩』において、「収骨」あるいは「旧骨」の二字でま
まる表現の用例は見当たらないようだが、7「征婦怨」(卷一)に「万里無
人収白骨、家家城下招魂葬」(万里 人の白骨を収むる無く、家家 城下に
魂を招きて葬る)と、なきがらがらないために仕方なく招魂葬を行うこと
を詠じていたように、遺族にとって遺体をとむらうのは重要なことであつた。
その【語釈】も参照。

「収旧骨」、百名家本では「將旧骨」に作る。こちらであれば、「旧骨を將
う」とでも読み、遺骨を供養すると解釈するのであろうか。「將骨」という
表現の例も見られないようで、意味が解しがたいが、前の「収旧城」と似た
表現なので改められたものであろうか。

この二句は、モデルとされる劉昌の事跡と最も関連が深い部分のようだ。
両『唐書』の伝のうち、記述がより詳しい『旧唐書』の方を挙げよう。

昌初至平涼劫盟之所、収聚亡歿將士骸骨、坎瘞之。因感夢於昌、有愧謝之
意。昌上聞、德宗下詔深自克責、遣秘書少監孔述睿及中使、以御饌・内造衣
服數百襲、令昌収其骸骨、分為大將三十人・將士百人、各具棺槨衣服、葬於
淺水原。建二塚、大將曰「旌義塚」、將士曰「懷忠塚」。詔翰林學士撰銘志祭
文。昌盛陳兵、設幕次、具牢饌祭之。昌及大將皆素服臨之、焚其衣服紙錢、
別立二石堆、題以塚名。諸道師徒、莫不感泣。

昌 初め平涼の劫盟の所に至り、亡歿の將士の骸骨を収聚し、之を坎瘞
す。因りて夢に昌に感じ、愧謝の意有り。昌 上聞するや、德宗 詔を下し
て深く自ら克責し、秘書少監孔述睿及び中使を遣わし、御饌・内造の衣服數

百襲を以て、昌をして其の骸骨を収め、分ちて大將三十人・將士百人と為
し、各おの棺槨・衣服を具えて、淺水原に葬らしむ。二塚を建て、大將を「旌義
塚」と曰い、將士を「懷忠塚」と曰う。翰林學士に詔して銘志祭文を撰せし
む。昌 盛んに兵を陳ね、幕次を設け、牢饌を具えて之を祭る。昌及び大將
皆な素服して之に臨み、其の衣服・紙錢を焚き、別に二石堆を立て、題す
るに塚名を以てす。諸道の師徒、感泣せざる莫し。

すなわち、脅迫されて和平を結んだ平涼の地で、劉昌が死んだ兵士の骸骨
を集めて土に埋めたら、昌の夢に死者が現れて礼を述べたので、德宗に報告
したところ、德宗は宮中からの供え物や官製の衣類を用意して、昌に遺骨を
収集し、二つの塚を建てて手厚く葬らせたという逸話である。『新唐書』に
もほぼ同じ記述がある。

ここに捨てられたままになっていた兵士の骸骨については、『資治通鑑』
卷三三二、貞元三年(787)の閏五月の条に、吐蕃との盟に当たって戦鬪とな
り、「唐將卒皆東走、虜縱兵追擊、或殺或擒之、死者數百人、擒者千餘人」(唐
の將卒 皆な東に走り、虜 兵を縦にして追撃し、或いは殺し或いは之を擒
え、死する者數百人、擒えらるる者千餘人なり)という記述がある。その「死
者數百人」の部分の胡三省注に「是後劉昌為涇原帥、収聚劫盟將士亡歿者骸
骨、具棺槨・衣服、葬于淺水原」(是れ後に劉昌 涇原の帥と為り、劫盟の
將士の亡没せる者の骸骨を収聚し、棺槨・衣服を具え、淺水原に葬る)と記
されており、この時の戦死者の骨を、後に涇原節度使となつた劉昌が手厚く
葬つたものである。まさに「旧骨を収」めたといえようか。

換韻してこの二句で一韻。前の部分で異民族を掃討したことを述べたのを
承け、ここでは、過去の先頭における戦没者の遺族が、官軍についてきて遺
骨を集めることを詠じている。辺塞詩および將軍の事跡を詠ずる詩の数は膨
大であり、注釈者の知る所はそのほんの一部に過ぎないので確かなことは言
えないが、恐らく収骨を詠ずる作品はほとんどないのではないだろうか。張
籍の「將軍行」のオリジナリティな部分であり、また、劉昌がモデルとなつたこ
とが感じられる部分でもあるといえようか。

15・16 磧西行見万里空、幕府独奏將軍功

〔磧西〕砂漠の西。ここでは広く西域の地方を指すのであろう。

固有名詞的にも用いられるようで、『通典』卷三三、職官一四、州郡上「都
督」の条に「開元中、凡八節度使」(開元中、凡そ八節度使あり)とあり、
その注に「磧西・河西・隴右・朔方・河東・幽州・劍南・嶺南、此八節度也。

後更増加、兼改名号」(磧西・河西・隴右・朔方・河東・幽州・劍南・嶺南、此れ八節度なり。後更に増加し、兼ねて名号を改む)という。『唐会要』卷七八諸使中「節度使」の条には「安西四鎮節度使、開元六年三月、楊嘉惠除四鎮節度経略使、自此始。有節度之号、十二年已後、或称磧西節度、或称四鎮節度。至二十一年十二月、王斛斯除安西四鎮節度、遂為定額」(安西四鎮節度使は、開元六年三月、楊嘉惠 四鎮節度経略使に除せられ、此より始まる。節度の号有るは、十二年已後、或いは磧西節度と称し、或いは四鎮節度と称す。二十一年十二月に至り、王斛斯 安西四鎮節度に除せられ、遂に定額と為る)という記述が見え、磧西節度使は後に安西四鎮節度使と改められたようである。とすれば、「磧西」ということばから具体的に意識されたのは安西(新疆ウイグル自治区庫車)あたりだったのであろう。

唐までの詩には用例が見えず、唐に入って、盛唐では岑参の詩題の中に「送李副使赴磧西官軍」「磧西頭送李判官入京」「武威送劉判官赴磧西行軍」等の例が見える。これらの「磧西」は安西を指して用いられているようだ。

中唐に至り、詩中の用例が見えるようになる。李益の「暮過回楽烽」(『全唐詩』卷二八三)に「烽火高飛百尺台、黄昏遙自磧西來」(烽火 高く飛ぶ 百尺の台、黄昏 遙かに磧西より來たる)という例は「磧南」に作るテキストもあるようだ。ここでは「磧西」に作るテキストに従うとして、この詩は「回楽烽」の所在について、靈州回楽峯(寧夏回族自治区靈武市の西南)とする説と、西授降城(内蒙古自治区杭錦後旗)の付近とする説とがあるようだが(『范之麟』『李益詩注』上海古跡出版社、一九八四年)、いずれにせよ安西から見ればはるか東方であり、「遙かに來たる」と述べているとはいえず、特に安西を意識したものはなく、西方の砂漠というくらしいの意味で用いているよう。

同時期の王建の「送阿史那將軍安西迎旧使靈樞」(『王建詩集校注』卷七)に「陰地背行山下火、風天錯到磧西城」(陰地 背きて行く 山下の火、風天 錯つて到る 磧西の城)といい、楊巨源の「贈史開封」(『全唐詩』卷三三三)に「曾從伏波征絕域、磧西蕃部怯金鞍」(曾て伏波に従い 絶域に征し、磧西の蕃部 金鞍に怯ゆ)という例がある。前者は、詩題にいうように安西を意識したものであろうか。後者は広く西域を指して用いているようだ。張籍の例はこれのみ。

「行見万里空」行軍しながら眺め渡しても、万里の彼方まで何も見えない。胡軍が滅ぼされ、はるかに広がる平原を見るばかりというのであろう。

「万里空」という表現は、唐までの詩には見られないようだが、『全唐詩』には用例が散見する。大曆期までの例は「万里 空しく○○」という例だが、

元和期に入り、劉禹錫の「奉送裴司空自東都留守再命太原」(『箋証』卷二八)に「漢壘三秋靜、胡沙万里空」(漢壘 三秋靜かに、胡沙 万里空し)という例がある。これは裴度の手腕により辺境地帯が平穩であることを表現した例であろう。

後の例になるが、晩唐の辺塞詩の例を二例挙げておこう。韋礪の「贈辺將」(『全唐詩』卷六六九)に「千騎鐵騎擁塵紅、去去平吞万里空」(千騎の鉄騎 塵の紅なるを擁し、去り去りて 平吞し 万里空し)といい、周朴の「塞下曲」(『全唐詩』卷六七三)に「夜來雲雨皆飛尽、月照平沙万里空」(夜來の雲雨 皆な飛び尽くし、月は平沙を照らして 万里空し)という。いずれも静まりかえった辺境地帯を詠じた例のようである。

「幕府」將軍の本營。軍中では決まった府署がなく、随時とばりをめぐらして府署としたので「幕府」と呼ぶ。すなわち、この將軍の部下たちということになる。

陳注は『史記』廉頗藺相如列伝に付す李牧の伝に「以便宜置吏、市租皆輸入莫府、為士卒費」(便宜を以て吏を置き、市租は皆な莫府に輸入して、士卒の費と為す)といい、その「索隱」に引く崔浩の注に「古者出征為將帥、軍還則罷、理無常處。以幕帟為府署、故曰莫府」(古者 出征すれば將帥と為り、軍還れば則ち罷め、理として常處無し。幕帟を以て府署と為す、故に莫府と曰う)というのを引いている。

歴史書等には用例が多いが、唐までの詩には二例のみ。梁の劉孝義(儀)の「從軍行」(『藝文類聚』卷五九)に「賢王皆屈膝、幕府復申威」(賢王 皆な膝を屈し、幕府 復た威を申ぬ)といい、庾信の「奉報寄洛州詩」(『庾子山集注』卷三)に「幕府風雲氣、軍門閔塞人」(幕府 風雲の氣、軍門 閔塞の人)という句がある。

唐に入ると用例が非常に多くなる。固有名詞の例を除けば、儲光羲の「送人隨大夫和蕃」(『全唐詩』卷一三九)に「大夫開幕府、才子作行人」(大夫 幕府を開き、才子 行人と作る)といい、李華の「詠史十一首」其四(『全唐詩』卷一五三)に「幕府功未立、江湖已騷然」(幕府 功未だ立たざるに、江湖 已に騷然たり)というなどの用例がある。

杜甫は詩中に十四例、一例を挙げれば、「送高三十五書記十五韻」(『詳註』卷二)に「十年出幕府、自可持旌麾」(十年 幕府を出づれば、自ずから 旌麾を持すべし)という句がある。張籍にはこの例のみ。

「幕府」、「唐詩紀事」卷三四等は「樂府」に作る。「樂府」であれば、本来、音楽をつかさどる役所の名、また、そこで採集された歌曲の総称。ここでは、唐の宮廷の音楽制作の役所ということになるか。「樂府」に作るテ

キストに従えば、下の「奏」も演奏の意として、樂府だけが將軍の功を演奏すると解することになる。

「樂府」は常見の語だが、唐までの詩中には用例がない。唐に入り、蘇頌の「御箭連中双兔」(『全唐詩』卷七四)に「那似陳王意、空隨樂府篇」(那ぞ似ん 陳王の意の、空しく 樂府の篇に隨うに)といい、吳少微の「過漢故城」(『全唐詩』卷九四。卷三七は王績の作とするが、韓理洲『王無功文集五卷本會校』によれば、王績の作ではないという)「句陳被蘭錡、樂府奏芝房」(句陳 蘭錡を被り、樂府 芝房を奏す)というなどの例がある。前者は曹植の「名都篇」を指して樂府と表現したもの、後者はかつて漢の宮殿で瑞兆を詠ずる芝房の歌が演奏されたことを詠じたものである。

杜甫には用例がない。張籍にはもう一例、439「廢瑟詞」(卷七)に「千年曲譜不分明、樂府無人伝正声」(千年 曲譜 分明ならず、樂府に 人の正声を伝うる無し)という句がある。

「獨奏將軍功」將軍の功のみを天子に奏上する。

「獨奏」、中国語の副詞の位置は動詞の前と決まっているため、將軍の功のみを奏上するの意とも、幕府だけが奏上するの意とも解しえよう。戦功に關して奏上するのは、戦争を遂行した幕府の役目であり、特別な事情がない限り幕府以外が奏上することはないのではないかと考え、ここでは前者で解しておいたが、よく分からない。諸賢のご教示がいただければ幸いである。

この詩の主題を將軍の功績を称えることと解する諸注は、この「獨」の字についてあまり注意を払っていないように思われるが、この「獨」の文字には、深い意味が込められているのではないだろうか。この点については、【補】の部分で詳しく述べたいと思う。

詩における「獨奏」の用例は、中唐以前にはないようだ。同時期の王建に「贈王枢密」(『王建詩集校注』卷六)に「長承密旨帰家少、獨奏邊機出殿遲」(長く密旨を承けて 家に帰ること少なく、独り邊機を奏して 殿を出づること遅し)という例がある。これは王枢密一人が奏上するという意味のようである。

後の例になるが、『全唐詩』に他に二例、趙嘏の「代人聽琴二首」其一(『全唐詩』卷五五〇)に「抱琴花夜不勝春、獨奏相思淚滿巾」(琴を抱き 花夜春に勝えず、独り奏し 相い思いて 涙 巾に満つ)といい、南唐後主李煜の詞「破陣子」(『全唐詩』卷八八九)に「最是蒼黃辭廟日、教坊獨奏別離歌」(最も是れ 蒼黃として 廟を辞するの日、教坊 独り奏す 別離の歌)という。いずれも音楽の演奏の例で、前者はたった一人演奏する意、後者は別離の曲ばかりを演奏する意のようである。

なお、陳注は『毛詩』小雅「六月」に「薄伐玁狁、以奏膚公」(薄か玁狁を伐ち、以て膚公を奏す)というのを引く。毛伝によれば「膚公」は「大功」の意であり、異民族を討伐した功績を天子に奏上するという例。

「將軍」の用例については、第2句の【語釈】参照。ここでは『全唐詩』にもう一例見える「將軍功」でまとまる例を挙げておこう。劉灣(劉濟の作ともいう)の「出塞曲」(『全唐詩』卷一九六)に「死是征人死、功是將軍功」(死は是れ 征人の死、功は是れ 將軍の功)の句がある。

なお、この詩のモデルとされる劉昌が、各所にとりでを築いた功績を認められて檢校尚書右僕射・南川郡王となったことは、第9・10句の部分の【語釈】に引く両『唐書』に見えた。

二句で一韻となった結びの部分。戦闘が終わって見渡す限り静まりかえった西域の風景と、將軍の幕下から將軍の功績が天子に奏上されることが詠じられて結ばれる。

【補】

一 「將軍行」の構成

この詩は、めまぐるしく換韻しており、押韻の上からは1・2／3／6／7・8／9／12／13・14／15・16の六段に分かれているが、意味の上からは大きく次の四段に分けられよう。

- 1・2 発端：異民族の侵入と將軍の任命
- 3／12 將軍の率いる軍隊の行動(出發／進軍／勝利)
- 13・14 過去の戦死者の収骨
- 15・16 結び：將軍の戦功の奏上

先にも述べたが、13・14句に描かれた、過去の戦死者の収骨のことを述べる作品は少ないと思われる。劉昌の事跡などを参考に、張籍が工夫した部分であろうか。

第1句と第3句が隔句対的な句作りであるほかは対句が用いられておらず、詩においては見慣れない語句を多く用いながら、軍隊の行動を直叙する句がほとんどである。散文的な表現が中心となった詩といえよう。

二 関連作品

【題解】の部分でも述べたように、『樂府詩集』では、劉希夷の「將軍行」と張籍の作を収めている。さらに、続いて王維の「老将行」を収めるが、李建崑注は、それをも類似の作としている。この二首を挙げておこう。

劉希夷「將軍行」(『全唐詩』卷八二)

- 1 將軍關轅門 將軍 轅門を闢き
- 2 耿介當風立 耿介 風に当たつて立つ
- 3 諸將欲言事 諸將 事を言わんと欲するも
- 4 逡巡不敢入 逡巡して 敢えて入らず
- 5 劍氣射雲天 劍氣 雲天を射て
- 6 鼓聲振原隰 鼓聲 原隰に振るう
- 7 黃塵塞路起 黃塵 路を塞いで起り
- 8 走馬追兵急 走馬 兵を追いて急なり
- 9 彎弓從此去 彎弓 此より去れば
- 10 飛箭如雨集 飛箭 雨の如く集まる
- 11 截囚一百里 囚を截つこと 一百里
- 12 斬首五千級 首を斬ること 五千級
- 13 代馬流血死 代馬 血を流して死し
- 14 胡人抱鞍泣 胡人 鞍を抱いて泣く
- 15 古來養甲兵 古來 甲兵を養うは
- 16 有事常討襲 事有れば 常に討襲するなり
- 17 乘我廟堂運 我が 廟堂の運に乗じて
- 18 坐使干戈戢 坐ながらにして 干戈を戢めしむ
- 19 獻凱歸京師 凱を獻じて 京師に帰る
- 20 軍容何翕習 軍容 何ぞ翕習たる

この詩は將軍の活躍を詠じたものであろう。軍門を開き風に向かつて立ち、武將たちも近寄りたがたい威厳を示している。戦闘開始前の將軍の様子から、戰場全体の雰囲気と具体的な戦況の描写を経て、勝利を収めることを述べる。そして將軍の信条を描写した後、華々しい凱旋の様子を詠じて結びとしている。これと同じ樂府題を用いているということも、張籍の「將軍行」が將軍を称賛する作と捉えられる一因かもしれない。

王維「老将行」(趙本卷六)

- 1 少年十五二十時 少年 十五 二十の時

- 2 步行奪取胡馬騎 步行 胡馬を奪取して騎る
- 3 射殺山中白額虎 射殺す 山中 白額の虎
- 4 肯教鄴下黃鬚兒 肯えて教えんや 鄴下 黃鬚の兒
- 5 一身軫戰三千里 一身 軫戰す 三千里
- 6 一劍曾當百萬師 一劍 曾て當たる 百萬の師
- 7 漢兵奮迅如霹靂 漢兵の奮迅 霹靂の如く
- 8 虜騎崩騰畏蒺藜 虜騎の崩騰 蒺藜を畏る
- 9 衛青不敗由天幸 衛青 敗れざるは 天幸に由り
- 10 李広無功緣数奇 李広 功無きは 数奇に縁る
- 11 自從棄置便衰朽 棄置せられてより 便ち衰朽し
- 12 世事蹉跎成白首 世事 蹉跎として 白首と成る
- 13 昔時飛箭無全目 昔時 飛箭 全目無く
- 14 今日垂楊生左肘 今日 垂楊 左肘に生ず
- 15 路傍時売故侯瓜 路傍 時に売る 故侯の瓜
- 16 門前學種先生柳 門前 種うるを學ぶ 先生の柳
- 17 茫茫古木連窮巷 茫茫たる古木 窮巷に連なり
- 18 寥落寒山對虛牖 寥落たる寒山 虚牖に對す
- 19 誓令疏勒出飛泉 誓つて 疏勒をして 飛泉を出ださしめん
- 20 不似潁川空使酒 似ず 潁川の 空しく酒を使うに
- 21 賀蘭山下陣如雲 賀蘭山下 陣 雲の如く
- 22 羽檄交馳日夕聞 羽檄 交ごも馳せて 日夕に聞く
- 23 節使三河募年少 節使 三河に 年少を募り
- 24 詔書五道出將軍 詔書 五道より 將軍出づ
- 25 試挘鉄衣如雪色 試みに鉄衣を払えば 雪色の如く
- 26 聊持宝劍動星文 聊か宝劍を持して 星文を動かす
- 27 願得燕弓射大將 願わくは 燕弓もて 大將を射るを得ん
- 28 恥逐胡騎 越甲して 吾が君に鳴らしむるを 恥ざらくは 越甲をして 吾が君に鳴らしむるを
- 29 莫嫌旧日雲中守 嫌お 莫かれ 旧日 雲中の守
- 30 猶堪一戰立功勳 猶お 一戰して 功勳を立つるに堪えたり

これは、若い頃戦場で奮闘したが認められず、老いて引退している將軍が、辺境での不穏な動きを耳にして、再び戦場に赴いて活躍したいと願う作。すなわち、劉希夷や張籍の作品と異って、樂府題の「老」の部分に重みがある詩であるといえ、やはり別の樂府題と考える方がよいであろう。なお、この詩は随所に故事を踏まえていて、訓読のみでは意味が分かりにくい部分もあるが、張籍の「將軍行」との関連があまり深くなく、また、都

留春雄氏『王維』(中国詩人選集、岩波書店、一九五八年)に詳しい訳注が収められているので、煩を避けて詳しい説明は省略することとした。

三 劉昌の事跡との関わり

【題解】に述べた通り、この詩のモデルは劉昌であると説がある。【語釈】の中で触れたように、事跡によく似た部分があり、劉昌をモデルにしていく可能性は高い。ただ、モデルが劉昌であったとしても、色々な部分で脚色を加えていることも確かである。

ここでは、劉昌の事跡と一致している点、異なっている点をまとめておく。

まず、一致している点としては、次のような点が挙げられる。

- ・ 弾箏峽周辺を守った。
- ・ 旧城を奪い返した。
- ・ 以前の戦死者の収骨に携わった。
- ・ 軍功を認められた。

つまり、大筋では一致しているといえよう。しかし、細かい部分では、次のような違いがある。

- ・ 劉昌は以前から節度使として赴任していたが、この詩の將軍は異民族の侵入を承けて都から出陣する。
- ・ 劉昌は平涼付近の防御を固めただけであるが、この詩の將軍は西域の方へどンドン攻め込んでいく。
- ・ 劉昌は自ら戦死者の収骨を行い供養したが、この詩では官軍に付き従った遺族が収骨を行っている。

すなわち、モデルは劉昌であるとしても、劉昌の事跡を事実として詠ずる伝記的あるいは詠史的な作ではなく、あくまで將軍を主人公とした「將軍行」という楽府作品になっているといえよう。

四 「將軍行」の主題

最後に、この詩の主題について述べておくこととする。

【題解】に述べたように、この詩の主題に触れた諸注は、この詩を將軍を

称賛する作ととらえている。そう解すると、この詩は、一貫して將軍のすぐれた事跡を詠じていることになるが、果たしてそうであろうか。

管見の及ぶ限りでは、この見方に唯一反対しているのが、この詩が劉昌の事跡を描いたと指摘する張国光「唐楽府詩人張籍生平考証」(前出)である。張氏は『新唐書』劉昌伝に「貞元三年入朝、詔以宣武兵八千北出五原。士卒有逗留沮事者、斬三百人乃行、举軍摺伏」(貞元三年 朝に入り、詔して宣武の兵八千を以て北のかた五原に出でしむ。士卒の逗留して事を沮む者有り、三百人を斬りて乃ち行き、軍を挙げて摺れ伏す)の部分に基づいて、劉昌の事跡は立派ではあるが、三百人を斬ったということから劉昌の残酷さがうかがえ、劉昌一人が功績を称えられているのは、張籍に「一將 功成つて 万骨枯る」の感慨を起させたのだと指摘する。

張氏のこの説明はあまりに劉昌の事跡に引かれ過ぎていられると思われ、張籍の「將軍行」は劉昌の事跡と異なる部分も含む、將軍を描いた楽府作品であるから、この作品の中で考えるべきであろうし(この詩の中の將軍はマイナス面は描かれていない)、また、劉昌に即して考えるとしても、軍紀を正すために「逗留して事を沮」んだ「士卒」を斬るという行為が、当時の目から見ても残酷な行為ということになるかどうかを考慮すべきであるとは思われるが、この詩を將軍批判の詩と読むことについては賛同したいと思う。

以下、なるべく「將軍行」に即しながら、この詩の主題に関する卑見を述べてみたい。

この詩の解釈のポイントになるのは、やはり二句一韻で独立した末尾の二句であろう。前の句の「磧西行見万里空」もやや寂寥感を感じさせるが、【語釈】に挙げた例にも見えたように、戦勝後の無人の荒野は辺塞詩でしばしば詠じられるものであり、特に問題となる風景ではないだろう。注目すべきは末句の表現であり、この句の「独」という文字を重く考えれば、將軍だけが功績を称えられることを非難した詩と読めるのではないだろうか。つまり、確かに將軍は官軍を率いて辺境地帯に攻め込み、異民族を一掃したが、その功績は將軍一人だけに帰せられるものではないと述べたいのではないだろうか。

モデルと目される劉昌という人物がおり、その人物は実際に立派な將軍といえようが、彼がモデルだったとしても、この作品においては、將軍だけが称賛されるのは納得できないという張籍の思いがこの「独」の文字に現れているのではないか。張籍が印象深い末尾の二句を工夫することは、これまでの作品にもしばしば見られたが、この詩でも、最後の二句で、將軍の評価が逆転されていると思われるのである。

將軍の軍功への批判といえ、後の例ではあるが、張氏も引いていた曹松

の「己亥歳二首」其一の「憑君莫話封侯事、一將功成萬骨枯」(君に憑む話す莫かれ 封侯の事、一將 功成つて 万骨枯る)という極めて有名な例もある。この「己亥歳」では、將軍の華々しい軍功の裏に、多くの無名兵士の死があるという対比になっているが、「將軍功」の部分に引いた劉錫の「出塞曲」(前出)に「死是征人死、功是將軍功」(死は是れ 征人の死、功は是れ 將軍の功)と詠じられていたのも、同じ方向の表現である。また、將軍の軍功は描かれませんが、戦死者の多さによって批判するものとしては、李白の「戰城南」(王注本卷二)に「士卒塗草莽、將軍空爾為」(士卒 草莽に塗れ、將軍 空しく爾為す)という例もある。

これらの作品では、無名兵士の死が描かれることによって、批判の意図が明確化されているものが多いが、張籍の「將軍行」では無名兵士の死ばかりでなく、將軍のマイナス面は全く描かれていないといえよう。そのためか、確かに將軍批判の意図はあまり明確には伝わってこないかもしれない。しかし、対比を用いないで將軍だけの功績が取り上げられることを批判した例としては、例えば李白の「塞下曲六首」其三(王注本卷五)で、勇壯な兵士の活躍と戦争終結を暗示する風景を詠じた後に、「功成画麟閣、独有霍嫫姚」(功成りて 麟閣に画かるるは、独り 霍嫫姚有るのみ)と結ぶ例も挙げられよう。李白もここで「独」の文字に深い意味を持たせているようである。

また、別の観点から見ると、張籍のこの詩が將軍を称える作品だとしたら、主人公である將軍は、華々しく登場した割には、後半部分では少々影が薄いといえないだろうか。

「斉しく隴に上る」のは「三十六軍」であつて、將軍が先頭に立っていると描写されている訳ではない。「兵を分か」つたのは將軍であろうが、実際に「処処」で「旧城を収め」たのは配下の兵士たちといえよう。この点については、例えば劉希夷の「將軍行」においても、実際に戦闘を行ったのは兵士たちであるという反論もあるが、劉希夷の「將軍行」の場合は、全篇一貫して將軍に焦点を合わせた描写となっており、戦闘や勝利の場面でも、將軍の指令を体現する軍隊が行うものとして、軍隊はいわば將軍と一体化したのものとなっている。これに対し、張籍のこの詩では、しばしば主語が変わることもあり、將軍を称える作品だったとしたら背後に感じられるべき將軍の計略というものが、読み手に感じ取られにくいものとなっているのではない

だろうか。

さらに、モデルとされる劉昌は自ら戦没者の収骨と供養を行ったが、この詩では、將軍ではなく「官軍」を「逐」つてやってきた、遺族である「辺人」たちが行ったということになる。そして結びでは、將軍の功績が直接詠じられるのではなく、部下である幕府が功績を奏上することが述べられている。もし將軍の功績が本当にすぐれていると感じるなら、幕府が奏上するなどという表現を使わず、もつとストレートに述べる事ができるであろう。現に劉希夷の「將軍行」では、威儀盛んに都に凱旋してくる劉希夷の將軍が描かれていたのである。このように見えてくると、この詩は將軍を称えたものだと断ずるには不安を感じざるをえない。

以上のように考えて、將軍の軍功ばかりが注目されるのを批判した作と解してみたが、さらに踏み込めば、ここで「幕府」が將軍の功績のみを奏上すると述べているのには、あるいは戦功の奏上の役目を務めるであろう、將軍幕下の文人たちに対する皮肉も込められているかもしれない。

劉禹錫や韓愈の例にも見られるように、当時の文人が中央の官位に就く前に節度使の幕僚として勤務することは珍しいことではなかった。羅氏年譜によれば、張籍自身も貞元十八年(802)三十七歳の頃から数年、誰かの幕下で章記を草していたことがあつたとされる。皇帝への軍功の報告に当たっては、彼らのような將軍幕下の文人たちが、その文章の腕を振るつたことであろう。そして、文官である彼らが戦場における下級兵士たちの苦勞に目を向けず、上奏文には雇い主である將軍の功績のみを言葉を尽くして書き連ねるといったことは、実際にしばしばあつたことなのではないだろうか。張籍の批判の矛先は、將軍だけが功績を称えられることだけでなく、多くの無名兵士の苦勞を理解していない幕府の文人たちにも向けられているとも考えられよう。

以上、本稿では、一つの可能性として、將軍の軍功ばかりが注目されるのを批判した作という方向の解釈を示してみた。ただ、諸注のように將軍を称えた詩と解釈することもできるだろうし、全く別の解釈ができる可能性もある。あるいは、張籍はさまざまな解釈ができるように、わざと意図をぼかしてこの作品を作つたのかもしれない。

(橘)